

---

# モンスターハンター～異世界に飛ばされて～

黒ノ音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター〜異世界に飛ばされて〜

### 【Nコード】

N34890

### 【作者名】

黒ノ音

### 【あらすじ】

主人公、佐藤 修斗さとうしゅうとは何処にでもいる高校生。しかし、不運にも、事故に遭ってしまい、そして彼が目覚めると、そこはモンスターハンターの世界だった。彼は、慣れないこの世界でどう過ごして行くのか、記憶は失わず、どう元の世界に戻るか四苦八苦する修斗を助けるのは、1人の少女だった。しかし、その時モンスターが現れて.....戦いあり、笑いあり、恋愛ありの作品です。更新率は遅いかも知れませんが、出来るだけ更新していきま

す戦いあり、笑いあり、恋愛ありの作品です。更新率は遅いかも知

れませんが、出来るだけ更新していきます

## プロローグ（前書き）

修斗「なんか俺が悲しい感じなんだが」

作者「気のせい、気のせい」

修斗「呪うぞ」

作者「出来れば、〇……………」

修斗「ネタばらしは止める」

作者「それではどうぞ！」

## プロローグ

俺は佐藤修斗<sup>さとうしゅうと</sup>何処にでもいる高校2年だ。俺には、人には言えない秘密がある。それは、異世界に飛ばされるという不幸だ。それで、これまで数多の苦勞と要らん能力まで身に付けてしまった。誰にも言えないが、背中に羽根が生えているのだって、家族にすら内緒だ。ん？ 飛ばされて、事件にならないのかって？ 実は飛ばされる時は、地球の時間は止まるんだ。だから、事件になったことは一度もない。故に、地球で誰も知らない言葉すら喋れてしまう、厄介な事だ。

「うー!？」

いきなり来やがった。飛ばされる前兆だ

「ったく、めんどくせえ」

最近、口癖が『めんどくせえ』になってきた。

そんなことを思っていたら、目の前が真っ暗になった。

.....ん？ 此処何処だ？ 見たところ、密林だな。  
って、ここもしかして.....

「またモンハンの世界かよ！」

俺が叫んだ途端、何の種類か分からない鳥達が飛び去っていった。

「喚装！」

【喚装】

武器や防具を瞬時の内に変える修斗の特殊能力。あまり乱用はしない  
「今回で5回目。しかも、前回からまだ4年しか経ってねえじゃねえかよ」

どうやって年月が分かったかはつつこまないでほしい

ギヤアア！ギヤアア！

「遠くから、ランポスの声……………しかも、何かを襲ってるのか？」

めんどくせえが行ってみるか。

この時、俺は後に後悔するとは思いつかなかった

## 登場人物紹介（前書き）

一応、一話〜五話までの登場人物です。

どんどん出していくのでその都度書いていく予定です

## 登場人物紹介

佐藤修斗 18歳

何故か異世界や異次元に飛ばされてしまう。

本作の主人公。様々な能力を持っており、性別が無く、女にも慣れる特殊な体をしている。

尚、女性になっても背中から生えている羽根は消えないらしい。

現在の装備

全身

修羅・真

武器

覇剛刀クーネタンカム

ナルガクルガ      ??歳

ランポスに襲われているのを修斗に助けられる。  
力はランポス以下と、とにかく弱い。

普段は粒子になって修斗の腕の中にいる

装備

モンスターなので、そのまま。



ヒナタ・フォーラル 15歳

駆け出しのハンターで、ドンドルマハンター養成学校が手違いで密林に一人だけ忘れ去られていた。  
修斗とは、夜にリオレウスと寝ている時に、発見された。

装備

防具

ハンターシリーズ

養成学校の手回しで自動マーキングはなし

武器

ルーキーナイフ

レオ 25歳

ヒナタと寝ている時に修斗に発見された。  
4年前から修斗の事を知っており、修斗のパートナーでもある。

種族はリオレウス。擬人化する事が可能だが、ヒナタを怖がらせてはいけないと使用はしなかった。  
リオレイアのレアとは夫婦だ

装備

モンスターなのでそのまま

レア                    22歳

修斗とは4年前に知り合っており、レオと一緒に修斗のパートナー。  
尚、修斗がモンスターの言葉が分かることも最初に気付いたのもレアだった。

リオレウスのレオとは夫婦だ

装備

モンスターなのでそのまま

クロス・ライト                    18歳

4年前にポケ村を襲った、ウカムルバスを討伐した伝説の英雄と呼ばれている男。

正体は力が究極になったときや誰かを助けたいという気持ちに限界点を突破した時の修斗がなった姿。  
修斗の時とは違い、桁違いに強い。

装備

武器、防具共に不明

2つ名は【ポケケ村の英雄王】  
しかし、この2つ名を本人（修斗）は嫌っている

## 登場人物紹介（後書き）

一応ナルガクルガは最弱です。はい

一話 何故こうなる(前書き)

すみません遅れました

## 一話 何故こうなる

「……………何故こうなった」

現在、俺の後ろをナルガクルガがびくびくしながら着いてきている。  
何故こうなったかは、1時間前に遡る。

### 1時間前

「一番みてはいけない光景だぞ。  
これは、あり得ない。何故、ナルガクルガがランポスに虐められてる」

「たたく、ただでさえ変な能力のせいでこいつらの言葉が分かるってのに……………」

あ、ナルガクルガがこつち見たよ。

あゝ、助けてほしい訳ね。

っていうか、ランポスに力負けするナルガクルガって一体……………」

《誰か……………助けて!》

《誰も助けに来ちゃくれないよ。此処でくたばりな》

「お前がな!」

俺はランポスの後ろに回り込み、そのまま掴んで遠くへ投げた。

「良く吹っ飛びやがるぜ」

俺はランポスを吹っ飛ばして満足し立ち去ろうとした。

「動けん」

それもその筈、ナルガクルガが足を掴んで離さないからだ。

「あのゝ、離して」

《貴方も、群れの人々と同じで私を見捨てるの?》

うっ! 涙浮かばせながらの上目遣いは苦手だ。

どうしたものか……………

「俺を見失わないように着いてきな」

《うん!》

つと、こうなつて現在に戻るわけだ。

相変わらず、後ろに引つ付いて離れないから鬱陶しい。

「いい加減、離れてくれないか？」

《嫌です》

拒否かよ。

「離れなさいって」

《やゝ》

「やゝじゃない！」

これは……………当分引き剥がすことは出来なそうだ。

「今日はもう日が暮れるから、何処か眠れる場所探すぞ」

《あつちに洞窟があつて誰も来ないからそこが良い！》

……………この感じは……………

「先に行つててくれないか？ 後から追い付くから」

《？ 分かった》

ナルガクルガは先に洞窟に向かつていった。



「生態系が狂ってるのか？ ドスランポスが5頭は異常だな」

目の前には、青い体の色、頭には立派な赤いトサカ。そして、鋭い爪の生えたランポスより少しでかいモンスターがいた。

「流石に5頭はきついな」

ギヤアアアア！ギヤアアアア！

この鳴き声と共に俺は太刀を鞘から抜いた

## 一話 何故こうなる（後書き）

次はドスランポスとの戦闘になります。

あと、ナルガクルガの名前も明らかになります

二話 激闘。そして、クロスの暴走（前書き）

遅れました。

二話 激闘。そして、クロスの暴走

「グオオオオオオオ！」

漆黒の闇の中、まるで悪魔の様な叫び声が響いた。

何故こうなったかは、今から10分前に遡る……………

（今、この場所には俺と、明らか様子のおかしいドスランポスが五頭。）

修斗が考えてる間もドスランポス達は襲ってくる。

（コイツらを倒すには、元の姿に戻ってからの方が良さそうだな）

修斗はドスランポスの攻撃を紙一重でかわし続ける。

「後ろがから空きだぜ！」

修斗は一頭のドスランポスに斬りかかったが

「な！？」

攻撃を弾かれたのだ。修斗の武器は覇剛刀クーネタンカム。切れ味は悪いが、それは防具のスキル『心眼』で補えている。

だからこそ、弾かれるということは修斗に隙を作らせてしまった。

「ギャアアアアア！」

二頭。ドスランポスが背中を引き裂いた。修羅・真シリーズは古龍ヤマツカミの素材を使用して作られる。

だからこそ、防具はかなり防御力が高くなり、堅くなる。下級のドスランポスに引き裂かれる事は先ず無いことだった。

しかし、引き裂かれた。有り得ぬ事が今、起きているのだ。

「ぐう！コイツら……………ただのドスランポスじゃねえ」

（それにコイツらの体を取り巻いてる闇は……………まさか、な。有り得ない）

「うおおおおお！」

しかし、ドスランポスには全然歯が立たなかった。

逆にドスランポスの攻撃を一方的に受けていて、修斗の体力は削られていく一方を辿っていた。

「おめえら……………馬鹿にすんのも、いい加減にしるよ……………」

刹那、辺りの雰囲気さがりと変わった。

ドスランポスも体につきまとう殺気に警戒し始めた。しかし、もう遅かった。

「ギャツ!？」

一頭のドスランポスの首が吹き飛んだ。そして、ドスランポスの首を薙ぎ払った人物がその場に立っていた。

修斗より少し背が高く、髪も眼も綺麗な蒼。そして、武器も防具も着けずに黒いコートを着て、黒いマントを羽織っていた。

「この姿に戻るのは久し振りだ。普段は修斗でいなきゃいけないかな。この姿に戻ることは出来ないからな」

その場に立っていたのは、クロス・ライト。4年前、姿を眩ませた2つ名が『ポケ村の英雄王』の男だ。そして、佐藤修斗が隠していた真の姿。

「来いよ。遊んでやるぜ」

クロスの挑発に乗ったドスランポスがクロスに飛び掛かった。  
しかし、クロスは簡単に攻撃をかわし、一頭、また一頭と首を薙いでいった。

そして、ドスランポスとクロスの一騎討ちとなっていた。

『ワガナカマノカタキ』

「ほう、喋りやがった。こりややっぱ、異次元が絡んできるとみて間違いは無さそうだな。」

クロスは、瞬間的にドスランポス（？）の後ろに回り込んだ。

「はあああああああ！」

クロスはおもいつきり右手でドスランポス（？）を薙ぎ払おうとしたが、ドスランポス（？）はその右手を止めた

「少しはやるようだな」

ドスランポス（？）は左右にステップを踏み、後ろに下がった。それが、クロスがその時、人間として一時崩壊するきっかけとなってしまった。

《遅いよ》

「！！！！！！」

そう。ナルガクルガが出てきてしまったのだ。

《ちょうどよい。はあー！》

ドスランポス（？）はナルガクルガをおもいつきりクロスの方へ吹き飛ばした。

《きゃあ！》

ナルガクルガの体には複数の傷が出来ていた。

「すまん。ミナ」

クロスは優しくナルガクルガの名前を言いながら頭を撫でた。

《大丈夫だよ》

明らかに無茶をして笑っていた。

「お前は絶対に……………」

刹那、ミナの背中ををドスランポス（？）が引き裂いた。

「この闇ドスランポスがあああああああ！」

《な、なんだこれは！？》

そこにいたのは……………鋭い爪、猛獣の様な眼、変わり果てた姿のクロスが立っていた。

《それで、我を脅かしたつもり……………》

それ以上先は闇ドスランポスは言えなかった。瞬時に接近され、右



眼を挟まれ、脚を切断。最後に首を薙ぎ払われた。

「グオオオオオオオ！」

漆黒の闇の中、まるで悪魔の様な叫び声が響いた。

『我を怒らせた罪。地獄で償うがいい』

変わり果てた姿のままクロスは、ミナを持ち、洞窟に入ってしまった。

同時刻・別エリア

『ふつ。どうやら4年振りの再会になりそうだな』

『そうね。先ずは私が行くわ』

『多分、洞窟で動けないでいるはずだ。看病してやってくれ』

『分かってるわ』

漆黒の闇の中。紅の飛竜と深緑の飛竜の話し声が虚しく響いた。

二話 激闘。そして、クロスの暴走（後書き）

次回、密林の洞窟にあの飛竜が降り立ちます

三話 動けぬ修斗。レアの荒療治（前書き）

感想とかお願いします

### 三話 動けぬ修斗。レアの荒療治

《う、うゝん》

ミナは目を覚ました。辺りは洞窟の中で、もうすぐで日が昇ろうと  
していた。

《あ！大丈夫！？》

近くに寝ていた修斗（姿を戻した後、再び修斗になった）に触れた  
途端

「痛つてええええ！」

そう。反動で動けなくなっていた。体の骨は軋み、筋肉は硬直して  
全身筋肉痛になっているのだから、この悲痛な叫びは仕方がない。

「お願い、痛いから触らないで」

《わ、分かった》

修斗は一先ず難を逃れた。しかし、それはほんの少しの間だった。

「……………」

（修斗：何かやな予感がするな）

そのやな予感があたることになる。

「あのさ」

《なに？》

「嫌な音がする」

《どんな？》

「まるで、リオレイアが空を飛び、此方に来てるようなそんな音がする」

《何でリオレイアって特定出来るの？》

ミナの疑問の答えが空からやって来た。

「……………レア」

バサッ！バサッ！翼の羽音が聴こえたかと思ったら、深緑の竜。リオレイアが降り立った。

『あら？やっぱり動けないでいるのね』

「うるさい。ほっといてくれよ」

《だだだだだだ、誰でしゅか！？》

ミナは驚きすぎて噤んでしまっていた。

『私？私はね、リオレイアのリア。4年前にその死に損ないのパ

「トナーになった一体だよ」

《そ、そうなんですか》

「死に損ないは無いだろ」

『ん？それじゃあ、何て呼べば良い？』

「4年前と同じ呼び方でお願いするよ。それと、4年前って言うても、向こうとこっちじゃ時間の流れが違う。だから、お前にとっての4年間であつても、俺にとっては半年にしか過ぎない。分かったか？」

『分かつてるわよ』

《話が難しすぎてついてけません》

「ははっ。良いよ、分からなくなつて。後、俺のことを好きになるのは構わないが、……………死ぬなよ」

《はう……………／／／／》

修斗が少し開けた間は、この際、気にしないでおく。

『早く治すためにも、私が看病しに来たから安心しなさい！』

「君のは看病とは言わない。あれは拷問だ！」

修斗が言い終わった直後、鼻先1？にプレスが激突し、修斗は吹き飛んだ

「そうしたら、今度は脚で掴んで人の体を……………イダダダダダダダダ！」

レアは修斗の体を脚で掴んで空に滞空、そして修斗の体を引っ張ったのだ

「イダダダダダダダダダダ」

《はう》

ミナはさっきのからまだ回復していなかった。その間にも、修斗は死にかけている。

『仕上げ！』

レアは何を思ったか、修斗を下に落とした

「こんの、糞リオレイアアアアアアアアア！」

その時、密林に悲鳴が響いたのは言うまでもない。

『大丈夫？』

「痛つつ。ったく、誰のせいだよ、誰の。まあ右腕が動くようになったから、すぐにでも治す。拷問は懲り懲りだからな」

修斗が徐に左胸に右手を刀を持つような形にして（……………）手を置いた

「ういしょつと！」

左胸から形を崩さずに手を離すと、その手には刀が握られていた。

『それなに？それに治すって、どうやって？4年前にはそんなの出さなかったよね』

（修斗：当たり前だ。出せるわけがない）

修斗はそう心で思いながら、自分の首から下を斬った（・・・）

「……………用件は」

『ドンドルマハンター養成学校が生徒を1人置いていっちゃって』

「それはいつの話だ？」

『3週間前ね』

「3週間！？」

『それから、私達が保護してるんだけど』

「分かった。先に帰ってきてくれ。俺は、そのミナを連れてかなきゃ行けないからな」

『エリア2に私達はあるから』



「了解」

レアはそれだけを言うと再び翼を拡げ、空に舞い上がった。

「ほら、ミナ。行くぞ」

《あ、あの！》

「ん？なんだ」

《何で、私が貴方を好きだって事が分かったの？》

「ちょっとな。ひたすらしつこい奴が居たから、そういうのに敏感になっちまったんだよ」

《そうなんですか》

「さあ、行くぞ」

修斗は、ミナと共に洞窟を後にした。

場所：密林エリア2

そこには、紅の飛竜、リオレウスと1人の少女がいた

「あ、あの〜」

『ん？なんだ』

「さっきの悲鳴は一体」

『気にするな。どうせレアが何かしたのだろう』

「レオさんとレアさんはどうして人語が話せるんですか？」

『それはな、4年前に俺とレアは人間をパートナーにして行動していた。一緒に居たからか、自然と話せるようになった。それだけだ』

「人をパートナーにですか！？で、でも、その人は今どこに」

『俺達の主は、異世界の人間だったからな、戻っていつてしまったよ』

「異世界の人間！？あ、会ってみたい……………でも、無理ですよね」

『会えるぞ』

「ふえ！？」

『また此方に飛ばされてきたみたいだからな』

「それじゃあ、さっきの悲鳴……………」

少女がそこまで言ったときだった。

「そりゃあ、俺がレアに落とされた時のだな」

『やはりな。いつ此方に来た』

「昨日だよ」

「ふえ!？」

少女は少し遅れて、素っ屯狂な声を上げた。何故なら、少女の後ろに修斗は現れ、何事もない様にレオと話をしていたからだ

「いちいち反応してらんねえよ」

『まあ、そんなことを言うな』

『あゝん、またマスターが速い』

少し遅れてレアが到着した。

「エリア1、エリア3、エリア4、エリア8、エリア7。どのエリアにも先回りしたからな」

『主、主はどのくらいの化け物なのだ?』

「レ、レオさん。化け物は流石に酷くないですか?」

「うん。ミラ系統を右人差し指で倒せるくらいの化け物」

修斗はニツと笑った。その顔をみた少女はドキツとして、少し頬が朱色に染まりうつむいた。

「ど、どんな化け物ですよ。それは」

「ここにいます」

『……………主』

「分かってる分かってる。ブルファンゴ50頭位で慌てないの」

『一桁足りないぞ、主』

「……………500か」

修斗の顔がおふざけから真剣な顔つきに変わった。

そして、少し時間が経ちブルファンゴの大群が押し寄せてきた。

「今回は1人の少女と一体のナルガクルガを護りながらの戦いだ。レオ、レア、準備は良いか！」

『いつでも』

『俺も同じだ』

「行くぜ！」

修斗はブルファングの集団に突っ込んでいった

### 三話 動けぬ修斗。レアの荒療治（後書き）

少しおかしくなっていたので、此处で少し紹介します

妖刀 ストル・クロス

ストルは相手を斬ることを目的として作られていない。  
ストルの能力は斬った者の外傷、内傷、病気を治す能力を有している。

尚、ストルはクロスの血から作られているため意志が宿ってしまっ  
た。

## 四話 ” 闇侵食 ”

「……………」 ” 闇侵食 ” 「

『 ええ。 相当な数が侵食されてるわね 』

『 一気にかたをつけた方が良さそうだな 』

1人と2体は、いつでも撃退出来るように、警戒をしながら話をしていた。

「 ” 闇侵食 ” って一体何ですか？ 」

突然、ヒナタが話し掛けてきた。そして、修斗はそれに答えた

「 名の通り、闇に侵食されている事だ。 あの中に、闇侵食されたモンスターは総勢48体…………… 苦戦を強いられるって事だ 」

修斗から告げられたのは、苦戦を免れぬ。と、言う事だった

『 48体……………」 』

『 相当な量だな 』

そして、次に修斗はとんでもないことを、言い放った。

「 いつそのこと、人間止めるけど、良い？ 」

レアとレアは即『 却下の方角で 』と、言った。

「どちらにしろ、人間から離れないと、殺されるのは目に見えてるぜ？」

修斗の言ってることは最もだった。

確かに修斗が人間を止めれば勝てる確率も出る。しかし、それで二度と人間に戻れない可能性だって有るのだ。

2匹共、それを心配して言っているのだ。

「……………万が一の時は……………殺せよ」

その瞬間、修斗は走り出した。

『私達は』

『もう、見守る事しか出来んな』

その言葉に、ヒナタが反応した

「どうして！？自分達の主人何でしょ！？見捨てるの！？」

その言葉を聞いたレオとレアは

『だつて』

目の前ではおもいつきりブルファンゴの首や胴体が吹き飛んだり、血が噴き出していた。

『俺達もあれの巻き添えを喰らい、死にたくは無いからな』



目の前ではおもいつきり殺戮が行われている

「……………納得しました」

『『それに……………』』

2匹が口を揃えてそう言った瞬間

「俺様の邪魔をするなああああ！」

という声が響いた

『『あれだぞ（よ）？』』

「確かに何も出来ませんね」

1人と2匹がその場で苦笑いをし、ミナは緊張のし過ぎで、気が抜けて、寝てしまっていた

《むにゃ……………もふもふだあ》

その言葉にすぐさま反応したのが、修斗だった。

「もふもふ……………そうか！」

その瞬間、修斗の身体が光り、姿を変えていく

『『そうか！あの姿だったら！』』

レオは気付いたようだ。

それと、ほぼ同時に修斗の身体が大きくなり、体制が四足に。そして、身体は獣の様な姿に変わっていく。

『遙か古代にこの大陸を制圧していた動物がいたと聞くわ。その動物は歯が鋭く、その強靱な脚で、大地を駆け巡った』

『そして、その毛の白さから白狼と呼ばれた。雌は、その毛の黒さから黒狼と呼ばれた』

「その話、私も知ってます！確か、【その強靱な力を持った狼の名は……………】で終わってる昔話ですよな？」

『ええ。その先は私達も知らないわ』

『唯一知っているのは目の前の白狼のみ』

そう。目の前には、昔話に出てきたあの白狼が立っていた。

「その色の違う2つを持つ狼の名は牙狼。この世界で最も強い力を持った狼」

目の前には、白く美しい毛を持った狼が立っていた。その姿は神々しくもあった

「さあ。終わりにしよう」

修斗……………牙狼がそう言った瞬間。闇侵食されているブルファンゴ以外のブルファンゴ達が一瞬で肉片と化した。

「す、凄い……………」

『あれが伝説の力』

『恐ろしい位に強いわね』

皆が口々に言っている最中、牙狼はその瞳を残った闇ブルファンゴに向けた。

「あの攻撃を全て避けたか。まあいい、これで終わりだ！」

牙狼は一頭の闇ブルファンゴの後ろに現れ、頭を噛み砕いた。その時、闇ブルファンゴの血が牙狼の白き毛を紅く染めた。

「これ以上は闇ブルファンゴには効かないか。仕方がない、身体を戻すでしょう」

再び牙狼の身体が光り、修斗に戻ったのは良いのだが

「あれ？髪の色が黒になってる」

『それだけじゃ無いわよ。目も黒になってるわ』

（レオ：闇には闇って訳か）

今の修斗は闇に染まった状態。この状態の修斗を知っているのは、今のところレオしかない。

そして闇に染まったことにより、右腕が黒く染まっていた。

「闇を使いこなせてないね。君達に本当の闇を見せてあげるよ」

それを聞いた闇ブルファンゴ達が恐怖で身体を震え上がらせた。  
そしてこう感じた。

”こいつは危険だ！”

そして、そう感じ、逃げようとしたブルファンゴ達の動きが止まった。

いや、『動きが止まった』のではなく、『動けなくなったのだ』。

「逃げるなんてよそうよ。危うく、存在を消しちゃう所だったじゃないか」

修斗は闇ブルファンゴの一頭の首をへし折った。

「なに……………あれ」

『酷いな。闇を纏ってやがる』

『あんな形状のものは初めてみるわ』

修斗の身体の周りは、黒い闇が辺り一面へと広がっていた。  
その闇が伸びて、ブルファンゴ達の動きを止めたのだ。

「さあ、死の宴だよ！」

一瞬にして全ての闇ブルファンゴ達が消えた。否、闇に吞まれたのだ。

「……………ふう」

いつの間にか髪の毛も、眼も、元に戻っており、身体から纏ってい

た闇も消えていた。

「怖い……………」

この言葉を発したのは、ヒナタではない。修斗が発した言葉だった。

『恐らく、自分が正気じゃなかったのに恐怖してるみたいね』

『当たり前だ。自分が闇に吞まれたのだからな』

「圧倒的な強さでした」

1人と2匹がそう言ったが、修斗は頭を抱えてしゃがみこんでいた。恐らく、闇の力の使いすぎで、頭が痛いのだろう。とレオは考えたが、実際は違った

（?????：結構派手に使ったね）

（修斗：昔よりは抑えた。が、文句は言えない）

（?????：本来、俺の力と修斗の力は反発するはずの力だ。反動が来てもおかしくはない）

（修斗：違うんだ。まるで自分が自分じゃなくなる感覚がしたんだ）

（?????：いいかい？俺達、闇の存在は修斗達の存在より、強く力を得てしまう。それで、自我を保てずに暴走することが多いんだ）

「気に悩む事は無いか」

修斗は立ち直った。そして、日が沈みかけているという状況なので、手っ取り早く話を進めるか。という考えに至った

「今日は、ブルファンゴ鍋にするか」

『ブルファンゴは癖が強いからあまり好かん』

『あら？でも鍋にしたら、関係ないわよ？』

「この肉片を使うんですか？」

「それしか方法は無いでしょ」

修斗はブルファンゴの肉片を持つと

「これを空に投げてっ」と

空へ放り投げた。

「投げてどうするんですか？」

疑問に思っ てヒナタは聞いたが、それが更なる疑問を呼び寄せることになる。

「凍ったやつが落ちてくるのを待つ」

疑問その1。

どうやったら投げた肉片が凍るのか

上空の方が気温が低いから凍る。

いや、高さによるから有り得ない。

疑問その2

なぜうえに投げたのか

「……………落ちてきたぞ」

ヒュ……………ドスンッ！

氷の塊が落ちてきた。

「何で肉片を投げて氷塊が落ちてくるんですか!?!」

「さあ？俺もわかんない」

あっさり言い退けた。

「はつきりしてください!」

『仕方無いわよ。マスターはただ腐らない様に肉片を上投げてただけなの』

『それが、氷塊になるとは俺達も考え付かなかった』

「それは……………そうですね」

「とりあえず、ベースキャンプに行って、飯食ったら、ドンドルマに行くぞ」

『また遊びに来てね』

『俺達はいつも此処に居るからな』

「分かってるよ」

修斗はミナを右腕の中にしまい、氷塊を持ってベースキャンプにヒナタと一緒に行った。

夜になり、ベースキャンプで荷物整理をしているヒナタに、修斗は話し掛けた。

「ヒナタはなんでハンターになろうと思ったんだ？」

「私、4年前に両親共にモンスターに殺されました」

「まただ。また4年前だ。それに、そのモンスターは確か……………」

「それで、私も殺されそうになった時でした」

「どっからともなくハンターが現れてモンスターの首を斬り落とした」

「そうです。そのハンターに憧れて、ハンターを目指そうって思ってたんです」

憧れなくて良いよ。ただの実験台<sup>ハムスター</sup>なんだから。俺は、実験台……………」



.....

「どうか、しました？」

修斗の様子がおかしいと感じたヒナタは修斗の顔を覗き込んだ

「あ.....何でもない。ヒナタはさっさと整理をすませな。さっさとドンドルマに行くから」

修斗はヒナタを悲しませたくはない。そんな気持ちに駆られた。

もう一度だけ前に進んでみよう。ヒナタを悲しませないように、もう一度だけ。頑張ろう

四話 ” 闇侵食 ” (後書き)

次回は修斗の身体秘密が少しだけ分かります

五話 目指すはドンドルマー！ついでに、ガレオス救出（前書き）

なんとか出来ました

## 五話 目指すはドンドルマ！ついでに、ガレオス救出

「ねえ、どうやってドンドルマまで行くんですか？」

そりゃ尤もな質問された。別に交通手段がない訳じゃない。ただ、手段を選ばないなら、これしかない。

「バイク」

「何ですか？その、『ばいく』っていうのは」

ほらな。そう返ってきた。幾らなんでも近未来の物を持ち出すのは気が引けるのだが、そうは言ってられんからな。

「簡単に言えば……………よつと！」

左腕の小さなポケットに入っていたカードを一枚取り出した。

「スタートオン。ブレイクバイク」

カードがいきなり光り、甲装が黒いバイクになった。

うん。辛うじて、二人乗りが出来るな。此処だったら、交通法なんか気にしなくても良いし！飛ばせば、早く着くし！

「ほえ」

驚いてるよな。俺だって驚いたさ。突然、未来に飛ばされて、突然渡されたのがこのバイク。訓練を積んで、やっと乗れるようになって

て、そしてまた飛ばされてを繰り返して。乗る暇なんか無かったもんな。

「とにかく、先に俺が乗るから、ヒナタはその後ろに載れ」

「その前に、名前を教えてくださいませんか？」

この場合、どちらを教えるか。普通常識を考えたら、修斗って教えた方が良さのだろうが、それじゃあちょっとこっちの世界じゃ使い辛いし、クロスって教えたら、伝説になってるから、混乱するだろうし。うゝん

「クロス。クロス・ライト」

うん。やっぱりこっちだな。

「伝説の人と同じ名前ですね！ドンドルマまで、よろしくお願いします」

いや、伝説の人であってますが。

「よいしょっと。後ろに乗れるか？」

うん。楽勝に二人乗りができるな。後は、ヒナタが乗るだけだが。

「乗りました」

問題なく乗れたな。

「わひゃ！？」

「一応、それ被ってる。凄いスピードが出るから」

「は、はい」

後ろを向いたら、ちゃんと被れてませんでした。なので、被しなおしてっと。

「それじゃあ、行くぞ！」

俺は物凄いスピードを出し始めた。最初は80kmだが、だんだん速度を上げ、今は250kmだ

「ヒナタ、大丈夫か？……………よっぽど疲れてたんだな。着くまで寝かしておくか」

後ろで寝てました。

「ブレイクモードからバーストモードに移行」

『バーストモードにチェンジ。オートパイロットスタンバイ』

バイクから無機質な声が響き、俺は操縦をやめた。勝手にバイクが380kmで走ってくれるからな

それから、暫く走っていたときだった。

「ん？あれは……………」



グギヤアアアアアア！って泣き叫びながら逃げてったよ。そんなに怖かったか？

「大丈夫。君達に危害を加えたりしないよ。ただ、助けに来ただけ。襲われないように何処かに移動だけはするんだよ」

こう言っておけば、ひとまず安心だろ。

俺はバイクに戻り、再び走り出した。

「余計な道草をしたが、気分は良いから、良しとするか」

それから、30分が経ち、ドンドルマに着いた。流石に夜ということもあってか、人が出歩いてはいなかった。逆に好都合だったのは言うまでもない。

「着いた。ハンター育成学校」

あら、名前が養成から育成にかわってる。まあいつか！先ずは、教官に文句を言わなきゃな

「たのもー！」

「夜分遅くに誰だ！大声を張り上げるのは」

教官が出てきたな。

「おたくの学校の生徒を3週間密林に放置、そして心配もせずにもそのままとは良い度胸してるんだな」



「なに？置き去りだと？生徒はちゃんと全員居た筈だが」

「がさつなんだよ！ヒナタ・フォールって名前の生徒だよ！」

「確かにヒナタはここ最近見掛けなかったが」

「密林にいました」

お、ヒナタ起きてきた

「それはどういうことだ？」

「教官に置き去りにされましたっていつているんです」

意外と強きで攻めるな。

「うゝむ。ヒナタは宿舎に戻りなさい」

「はい。クロスさん、ありがとうございました」

「ゆっくりお休み」

「はい」

ヒナタが小走りで宿舎に入っていくのを確認し、お互いに向き直った。

「理事長室に通してくれる？」

「うむ。そうさせてもらおう」

俺は教官と一緒にハンター育成学校に入っていた。

## 五話 目指すはドンドルマー！ついでに、ガレオス救出（後書き）

今回はかつて、クロスが組んでいたパーティーメンバーの事が少し出てきます。

ブレイクバイク

能力、

AI（人工知能）

モードチェンジ

バーストバイク

能力

マシンガン

レーザー

エネルギーガード

モードチェンジ

クロスが滅多に使わないバイクです。この小説では頻繁に使用します。

クロス・ライト

何十年前に身体を生体実験の実験台にされ、とてつもない能力を秘めている。しかしまだ明かせない

六話 無茶な願いと忌むべき記憶（前書き）

急遽、前後編に分ける形になりました。

## 六話 無茶な願いと忌むべき記憶

「理事長。理事長に会いたいと言っている方をお連れしました」

「うん、いいよ。通して、あと、二人で話したいから通した後は戻っていいよ」

「理事長がああ言っている。くれぐれも怒らせぬ様に気をつけてもらいたい」

クロスはそんなのお構い無しに小声でこう呟いていた。

「チリー・リーズ……………いや、チーちゃんは何を言うてるかな?」

「何をごちゃごちゃと言っている。さっさと行け!」

「それがお客様に対する態度ですか?はいはい、行きますよ」

理事長室の扉を開け、中に入ってしまった後、教官はこう呟いた

「あの者、ただ者ではないな」

そう言っただけで理事長室の前から立ち去った。

「やあ、君がボクに会いたかったって言ってた人?」

「……………チーちゃん」

「！？今、ボクの事を何て呼んだ！？」

「セツちゃんにリーちゃん。そして、チーちゃん」

「君……………何者？」

「俺は何者でもない。ただのクーちゃんさ」

「……！」

理事長（と言ってもまだ25歳だが）が立ち上がって、クロスに抱き着いた。

「クーちゃん！」

「抱き着くのはよしてくれ。動き辛い」

「そうだよ。ごめんね、クーちゃん」

「いや、久し振りの再開だから、仕方ないよチーちゃん」

「クーちゃんはどうして此処に？」

「飛ばされたんだよ。別次元からね。そして密林で、ここの生徒を見つけて、届けに来たって訳さ。そんなことより、チーちゃんはさつさと良い男を見つけれよ。可愛いんだから」

「最後のセリフは軽々しく言っちゃ駄目だよ。無責任に人を惚れさせるから。クーちゃんが言ったらね」

「確かに」

そして、クロスは本題を切り出した

「なあ、俺をヒナタ・フォールのいるチームに入れてくれないか？」

「本気？」

「無茶苦茶なお願いなのは重々承知の上だ」

「クーちゃんはあの子達と違ってG級ハンターなんだよ？」

「……………」

んなことわかってる。俺にはやらなきゃいけない事があるんだよ！

（4年前）

「何だよ……………この村は」

着いた時には村は壊滅状態。しかもモンスターが占領していた。

『酷いな』

『どうするの？御主人様』

「レオは生き残りを守ってくれ。クウは俺と来てくれ」

『分かった』

『分かりました、御主人様』

レオリオレウスとクウイャンクツクを連れて村に入ってしまった。

「はあああああああ」

俺は雄叫びをあげながら、リオレウスを一刀両断した。

「はあはあはあ。流石に多すぎだな」

『御主人様、大丈夫？』

「ありがとう、クウ。俺は大丈夫だ」

あなた！そっちに行ったわ！

ヒナノ後ろだ！ウワアアアアア！

「嫌な予感がするな。行くぞ！クウ！」

『はい！』

俺が駆け付けたのは村から少し外れた位置にある広場だった。そこには倒れている夫婦と1人の少女がいた。そして、少女に向かっていくティガレックスが一頭

「やらせるかよ！」

俺はティガレックスを右手で弾き返した。ティガレックスは何が起こったか状況を把握出来ずにいた。



「大丈夫か？」

「う、うん。でもお父さんとお母さんが」

「すまん。もう少し早く駆け付けていれば」

「ハンターさんのせいじゃないよ！だから、自分を責めないで？」

「ありがとう。君はその優しい心と強い心。両方を大切にしてくれから生きていくんだよ」

「うん！」

その時、ティガレックスの怒声バインドボイスが聴こえた。

「死にたがりやはさつさと死んじやいな！」

瞬時にティガレックスの懷に潜り込み、昔、身体を生体実験をされたときに身に付いた能力を1つ、使った。

「はああああ！轟竜斬！」  
ティガスラッシュ

俺の右腕はティガレックスに変化していて、そのままティガレックスを切断した。

「……………」

『お疲れ様です。御主人様』

「ああ。この子の両親を弔わなきゃな」

それから、俺はその子……………ヒナタの両親を埋葬し、村の復帰に手を貸した。それで、誰にも別れを言わずに、村から身を引いた

〈現在〉

「チーちゃん」

「大好きなチーちゃんの頼みだもん。ボクも出来るだけやってみるよ」

「サンキュー！チーちゃん！」

俺がお礼を言うと言顔を真っ赤にして「お、お礼を言われるような事じゃないよ」とそっぽを向いてしまった。

それじゃあ。もう2つ、俺の生い立ちと身体の謎の能力について話しておくか。

〈17年前〉

俺は、人じゃない。アカムトルムとウカムルバスから産まれた。しかし、姿が人だったのにも関わらず、父さんも母さんも優しくかった。

「ねえ、父さんと母さんはモンスターなのに、何で僕は、人間なの」

『細かいことは気にしない方が良いわよ』

『そうだぞ。今は寝なさい』

「はい」

姿は違えど、幸せだった。しかし、それを引き裂いたのは、モンスターの襲撃と取り戻してしまった記憶だった。

『貴方は此処に居なさい。絶対に出てきちゃ駄目よ』

「母さん？母さん！」

どうして……………どうして置いていくの？

そんな考えが頭を巡っていた時だった。目の前に一頭のギアノスが現れた。

『ねえ、貴方はどうして此処に居るの？』

「母さんが此処から出ちゃ駄目って言ったから」

『淋しくないの？』

このセリフを聞いたとき、俺の記憶と癖、そして戦闘スタイルと経験が蘇った。俺が、父さんと母さんの子どもとして、産まれる前の記憶が。

「寂しくないわけない」

『私ね、今此処に住んでる、アカムトルムとウカムルバスを殺そうってモンスターの群れから逃げてきたの』

.....そうか、それでか。

『それで、一番効果的なのが、目の前で二人の子どもを殺すのが良いつて言ってる』

.....守らなきゃ

『私、もう嫌で、逃げてきたの。ねえ、此処に居ると危険だから、一緒に逃げよ?』

.....危ないのは

「あんたの方だ!」

俺は咄嗟に叫んで、ギアノスの後ろに迫っていた、ランポス2頭の頭を吹き飛ばした。

『え.....さっきまで子どもだったのに』

ギアノスが言っている事は尤もだ。最初の外見は5〜6歳だ。しかし、今の俺は17〜18歳だからだ。

「そこをつつこんだら終わりだぜ。そういや、名前聞いてなかったな。俺はクロス・ライトだ」

『私は、ディア・ギアノス』

「ディアか、良い名だ。ディア、此処から動くなよ。絶対に戻ってくるからな」

『待つて！わざわざ死に行くような事するのは止めて！自殺行為よ！』

「そんなこと分かってる。でもな、俺にはやらなきゃいけないことがあるんだよ」

『絶対に戻ってくる？』

「ああ」

『私、信じて待つてるから』

「ああ！」

それで、俺は洞穴から飛び出した。

## 六話 無茶な願いと忌むべき記憶（後書き）

主人公は人じゃありませんでしたね。

次話は飛び出した後、両親の元へ走っていったクロス。そして、決着。

その3年後に生体実験をされ、クロスは……………

次回をお楽しみに^^

七話 クロスの覚醒とディアの初恋。そして、禁忌の生体実験（前書き）

相変わらずの亀更新です

## 七話 クロスの覚醒とディアの初恋。そして、禁忌の生体実験

「……………あそこか」

そこでは、一体のアカムトルムに対して五体のグラビモスが、そして一体のウカムルバスに対して六体のリオレイアがいた

「水よ。我に力を貸せ！」『水爆流』！」

クロスはそう言うと、何処からともなく大量の水が流れてきて、リオレイアとグラビモスを押し流した

『一体誰が』

『でも助かったわ』

二匹がたわいもない事を言っていると、そこにクロスが歩いてきた。

「……………」

『人間！？』

『何故此处に人間が』

「そんなことを話している暇などない。奴等が来るぞ」

クロスが指を指した方向を見ると、リオレイアとグラビモスは立ち上がり、臨戦態勢に入っていた



「そんな少数でこの俺に勝とうとは……………瞬殺してやるよ」

そう。その言葉通りになっていた。二匹の目の前には、リオレイアとグラビモスの肉片。そして、赤く血で染まった少年だった。

『……………』

『もしかして、お前は!』

絶句していたウカムルバスに対して、アカムトルムは何かに気付いたようだ。

「そっから先は言っな。あの時の傷が疼く」

少年はそのまま、崖の上を見上げ

「居るんだろ?出てこいよ」

そう言った。すると、一匹のドスギアノスが現れた。

「やはりか」

『だったらどうする?』

「あの時の仕返しをさせてもらっぜ!」

クロスはドスギアノスに接近し、攻撃をしようとしたが、バックステップをとられまた距離が離れた

「蒼焰の激蒼破!」

蒼く輝く焰の斬撃がドスギアノスへと放った

『ギヤアアアア』

それに対してドスギアノスは吼えると、簡単に斬撃を避けた

「やはり一筋縄ではいかないか」

『行動がワンパターン過ぎる』

「そりゃそうだ。そのアカムトルム………いや、父さんを助けたときに死んでるんだからな」

『……………やはり、薄々感付いてはいたが、いつ記憶が戻った』

「ついさっき」

『えっと、話が見えてこないのだけでも』

ウカムルバスがそう言ってアカムトルムと少年を交互に見た。

「分りやすく説明すると、俺はそこに居るドスギアノスからアカムトルムを庇って死んで、二人の子供に転生したの！だから、母さんや父さんの事を知ってるの」

『それじゃあ、貴方は私達の息子とでも言うの！？』

「だからそうなんだって」

そして、再びドスギアノスに向き直すと、何処からか一本の刀を取り出し

「一瞬で決める！」

『出来る物ならな』

そして、クロスとドスギアノスは正面から衝突した

「極・神焰斬！」

『な、何！？そんな攻撃、俺は知らないぞ！グワアアアア！』

そう。斬撃を避けたドスギアノスに斬撃が追尾してきたのだ

「死に際に教えてやる。『極』が付く技は全てが自動追尾となるんだよ。だから、避けても関係なく攻撃が当たるんだよ。残念だったな」

『……………』

ドスギアノスは最後に小声でクロスに言った後、息絶えた。

「成る程な」

クロスは1人何かを考え始めた

『これで終わったわけか』

『もう懲り懲りよ』

「なあ、父さん」

『何だ』

「俺、この場所から出るよ。ちょっと世界を見てきたいんだ」

『良いぞ』

「母さんは」

『絶対にまた顔を見せる事！これを約束出来ればね』

「はは……………きついな。でも約束する」

そして、クロスは始めに来た道を戻り洞穴に向かった。

「ちゃんと待っててくれたんだな」

『ムニヤ』

ディアは寝ていた。

「ディア、起きろ」

『?……………!!!!』

ディアは声にならない叫びをあげて起きた。クロスの顔がどアップだったから仕方がない

「俺はちよつと世界を見てくる。だから、ディアはこの雪山で待っててくれないか？絶対にまた来るから」『絶対に戻ってきてくれる

「？」

「ああ。ごめんな、ディアの初恋の相手がこんな俺で」

『！何で私が貴方が好きだって分かったの？しかも、初恋だってことも』

「ギアノスにしてはそんなに歳はいつてない方だから、まだ恋はしてないだろうなってが1つ。そしてもう1つは、今のディアがやってる行動をよく見てみ？」

ディアは落ち着いて自分の行動を見直した。クロスに抱き着いていたのだ

『ひゃ！』

素っ頓狂な声をあげてクロスから離れた

「絶対に戻ってくるからな」

クロスはそう言い残し、雪山を後にした。『絶対にだよ』という声をクロスは最後に聴いていた。

雪山を出てからすぐに……………クロスは拉致られた。理由は生体実験の実験台にする為だそうだ

「……………はっ！う、動けねえ」

「目が醒めたかね？」

目の前に研究者らしき人物が立っていた

「ああ。最悪な目覚めだよ」

「そうか。君は我々の研究の実験台第一号となるべく我々がここに運んできたのだよ」

「最悪だな」

「そうか。なら、早速実験を開始しよう」

するとクロスの両腕に各二本ずつ注射器が射された。注射器を目で追っていくと何やら液体の入ったタンクに繋がっており、チューブを下り、クロスの中へ入っていた。

「これは一体何だ！」

「人間がモンスターの細胞に適応出来るかの実験だよ。」

「グワアアアア！」

クロスは急に絶叫し、痛みで気を失った

「これを奥の部屋に放り込んでおきなさい」

そのまま、クロスが目を覚めたのは一時間位経った時だった。

「気が付いた？」

目の前に女性の顔があったので、一応心の中で驚いておいた

「此処は……………」

「何かの部屋だな。俺達四人はどうやら実験されるためだけに連れてこられたらしい」

よくよく見ると自分を含め四人いた。クロスは早速自分の中にある細胞を調べようと目を閉じた

「……………」

「何をしているの？」

集中しているためか、答えられない

「放っておけ。どうせ現実逃避だろ」

「そうじゃないみたいなの」

「何がだ？」

女性二人によると、クロスは目を閉じた途端に身体から尋常じゃない汗を吹き出し始めたらしい

「……………はっ！」

クロスは突然目を見開き、最初にそばにいた女性二人の額に手を置いた

「右がナルガクルガ。左がグラビモス」

「え？」

「何？」

二人とも状況が理解出来ないようだ

「そして、その貴方はリオレウスですね」

「ご名答だ。それで、君は？」

男二人だけで会話を続ける

「手始めにティガレックス。そして、グラビモス、リオレウス、ナルガクルガの細胞を入れられたみたいです」

「そりゃ拷問だな」

「多分、俺が一番遅くに目覚めたのは一番最初に全ての細胞を入れられ、そして、あなた方はそれが俺で危険と判断され、モンスター一体分の細胞を入れられた」

「その推測で良いと思うぞ。俺も同じ考えだ」

「なに勝手に話を進めてるの？」

「でも、それが本当なら、私達は人間じゃなくなっただって事よね」

「そう考えるしかないですね」



それから1ヶ月もクロス達は研究者達に実験を繰り返され、心身ともに限界が来ていた

「ねえ、名前教え合おうよ。また何処かで逢えるかも知れないから」  
「そうだな。此処から出て離れ離れになってもまた逢ったときに分かるようになる」

「私はリエン。グラビモスの細胞を入れられたわ」

「私はエミイ。ナルガクルガの細胞に入れられたわ」

「俺はガード。リオレウスの細胞に入れられた」

「最後に俺はクロス。あなた方の細胞に加え、ティガレックスの細胞を入れられた」

「最後に……………」

「……………また逢おう（ね）！……………」

そして、三人を逃がす為にクロスは暴走し、そして三人が無事逃げたことを確認した後、消息を絶った。

決して語られる事のない、クロスの忌むべき記憶の物語。今後のクロスに関係するとは知らずにクロスはまた前へ歩き始める

七話 クロスの覚醒とディアの初恋。そして、禁忌の生体実験（後書き）

次回はとうとう決まる卒業までのメンバー決め！その時、ヒナタの班に入るサプライズメンバーとは！？

次回『予想外のメンバー決めと街で暴れる三体のモンスター』

## 八話 予想外の班決めと街で暴れる三匹のモンスター

クロスが、ヒナタを送り届けてから翌日。広間に訓練生が集められ、教官がある言葉を口にした。

「お前らは、あともう少しで卒業だ。それで、最期はPT訓練だ」  
パーティー

突如、教官から伝えられた言葉により、訓練生は慌たしくなった。他の所はちゃんと四人になっているのだが、ヒナタを含む余り者は三人。PT訓練は四人でやるので人が一人足りないのだ。そこで教官は朝から信じられない発言をする。

「ヒナタ、ルイ、ララのパーティーには特別な人が入ることになっている」

その言葉を聞いて、再びざわめき出す。

そして、広間に入ってきたのは

「うつす！ヒナタ。これからよろしくな！……………一応自己紹介しておくぜ。俺はクロス・ライト。なんかいつの間にか伝説とかにされちゃってるそんな感じだから。HRは9、これでもG級ハンターだからよろしくな」

周りが騒然としているなか、ヒナタが

「な、何でクロスさんが？」

「昨日の夜に頼まれちゃったからだよ」

そのタイミングで入ってきたのは、理事長だった。  
それで再び辺りは騒然とする。

「とりあえず、PTメンバーはこれで決まりだ。PTメンバー専用の宿屋を用意した。一部屋に各4つ小部屋が設けられている。うまく使えよ」

そう言って教官は広間を後にした。訓練生もその宿屋の部屋を確認するために広間から出ていき、広間にはヒナタとクロスと理事長とララとルイが残った

「チーちゃん。わざわざ、こんなときに言うことじゃないだろ」

「それじゃ、クーちゃんはどうしてほしかったのかな？」

「わざわざあのタイミングでばらさないでくれ。他の機会だったら幾らでもばらしてくれても平気だったぞ」

「えへへ」

「笑って誤魔化すな！」

この二人の親しげな会話にララとルイとヒナタは、啞然としている

「何でクロスさんは理事長とそんなに仲が良いの？」

「それは、昔一緒に「一緒にPT組んでたからだよ」ツチ。先に言いやがった」

クロスは悪態をつき、理事長はご機嫌だった。そこにとんでもない知らせが入った。

『大変だあ！モンスターが三匹も街に侵入してきた』

『一匹はナルガクルガ、一匹はグラビモス、一匹はリオレウスらしいぞ』

「どうする？モンスターだって！」

「……………もしかして」

クロスはそう言い残し、瞬時に居なくなった。

「「「！?」」」

否、人間離れた速さを出したためか、見えなかったただけだった。

「此処か」

クロスは三匹の目の前に来ていた。ここから、クロスの信じられない力が明らかになる。

『ギヤアアアアアア！』

リオレウスは咆哮を放つ。バインドボイスしかし、クロスには無意味だった。それどころか背中に乗られていた

『！!?!』

「空の王者だろう。そんなに弱くてどうする、ガード」

『!?!?』

驚くりオレウスの背から退き、グラビモスに対峙する。

『グオオオオオオオ!』

グラビモスはグラビム鎧竜熱線を放つが、そのたびにクロスに避けられていた

「動きが鈍い! 以前のリエンはもっと速かったぞ」

『!?!?』

グラビモスもその場で固まり、驚いていた最後に後ろから奇襲を仕掛けてきたナルガクルガと対峙した

「気配隠せてない。前のエミイはそうじゃなかったはずだ。前のエミイの方が好きだったな」

天然時限爆弾炸裂

『.....』

ナルガクルガは驚かずにクロスを見つめていた

「.....気絶してる」

そのまま気絶したナルガクルガ

我に返ったりオレウスはクロスに向かってプレスを放った

「エミィに当たるだろうが！」

逆にクロスを本気にさせてしまった。小一時間が経った辺りでヒナタ達はやっとクロスの居る場所へ着いた

「どうやったらこんな状況になるんでしょうか」

そう呟くルイ。そう呟くしかないからだ。目の前では、泣きながら必死にクロスを止めるナルガクルガ。そんなクロスにぼこぼこにされているリオレウス。ただただ呆然と見ているだけのグラビモス。そんな奇妙な光景が広がっていた。

『お願いだから、もうやめてあげて』

「やだ」

『ゴフツ！クロス、また一段と強いツツコミが出来るようになったな』

「いや、俺はツツコミじゃなくてボケだから！」

『ほへ』

「リエーン、そろそろ戻ってこい」

『はっ！』

クロスの言葉でやっと我に返った。

「そろそろ人間に戻れ。このままだと討伐されるぞ！っていつか俺が討伐するぞ！」

『私にはそんなことしないよね？』

「ま、まあエミィにはしないけどさ」

「いい加減、そのえこひいきを止めろ」

「何だよ！ガードだってリエンを気にしてるくせに」

「な！？」

『／／／／／／／／』

グラビモスは体が白いために、顔を真っ赤にしているのがバレバレだった

「あの、クロスさん」

「おお、追い付いてきたか」

「追い付いてきたときにはもう終わっていたがな」

「それを言っなよ教官」

「しかし、今の現状はなんだ。男二人が喧嘩してモンスター二匹がそれを仲裁してるなんてシニールだぞ？」



「そういや、リエンもエミイもそろそろ人間に戻れ。狩られても仕方がないぞ」

『うん』

ナルガクルガとグラビモスが輝き出し、気が付くと二人の女性がたっていた

「これでいい？」

「オッケー」

「えっと、この人達は？」

ヒナタはしてはいけない禁断の質問をしてしまった

「……………ヒナタ。それはこの三人に聞きな。俺は少しだけ一人になりたい」

そう言うと、クロスは物凄い速さで、何処かへ行ってしまった。

「えっと、一体何があったんですか？」

「本当は私達もあまり話したくはないの。でもね、特別に教えてあげるね」

省略

「……………」

「まさか、人が人を使って生体実験を……………」

「あの噂は本当だったとは」

教官は今いるメンバーの中で最年長なため、生体実験の噂は耳にしていた。「……………」

皮肉な物だ。全てを隠し通せないとは思ってはいたが、こんなに速くばれるとは。一度、あつちに戻った方が……………「此处に居たんですね」なっ……………！！

「何故、此处だと？」

「何と無いです。あと、そのお」

「聞いたんだろ。あの忌々しい事を」

「……………はい」

「別に責めてる訳じゃない。ただ、隠し通せると甘い幻想を抱いていた、俺が悪かったただけだ」

「……………」

「ヒナタ」

ヒナタはいきなり名前を呼ばれてビクツとした

「はい」

そしてヒナタが返事すると共に、クロスはヒナタに抱き付いた

「あ、あの」

「少しだけ。少しだけだからこのままでいさせて。化け物が人の温もりを求めちゃいけないとは思ってるけど……………」

「クロスさんは化け物じゃないですよ。今も人じゃないですか」

「……………」

ヒナタはクロスの言葉を遮り、クロスは黙ってしまったが、ヒナタは話を続ける

「そんなに自分を責めちゃダメですよ。それを4年前に教えてくれたのは貴方でしょ？」

「……………」

……………「まったく、分かっちゃったのか。そうだよな。自分が言っただけを自分が破っちゃダメだよな。」

「ヒナタ」

「はい」

「しゃがんで」

「はい？」

「今すぐに！」

クロスは慌てていた。その原因はクロスの高すぎる感知能力にあった

「ひゃう！」

ヒナタがしゃがんだと同時に熱線が頭の上を通過した 「PMNO・  
12」

クロスはそう呟いた。

「PM？」

ヒナタは聞き慣れない言葉に戸惑った

「プロトモンスター。元々は俺達ZNO・で実験されてた実験だ」

「ZNO・……………」

「最も危険な生物に与えられるランクがZ。それに俺達は指定されていたんだ。俺はZNO・01」

それは先程聞いたクロスと他の三人の過去。そこで呼ばれていたのがNO・01、02、03、04だった。

「どうやら、No. の話も聞いたみたいだな。都合が良い。昔、ヒナタを助けた時の腕を覚えてるか？」

「う、うん。まるでティガレックスみたいだった」

「そう。ティガレックスであってる。」クロスの腕はいつの間にかティガレックスと同じ腕になっていた。

「因みに左腕と尻尾はナルガ」

クロスはそう言うときさまナルガクルガの腕と尻尾を出した

「胴体はグラビモス。そして、足と顔はリオレウス」

そう言うてる間にもクロスは変形を続けていたため、ヒナタの目の前に化け物が立っている形となった

「ク、クロスさんですよね？」

「そうだけど？」

そんな気まずい空気が流れるなか、空気が読めないモンスターがクロスへ攻撃を仕掛けた

「氷結プレス」

クロスはそう言って青白い炎を口から出すとモンスターにぶつけた

『グガア！』

ピキイイイン！

そついう音がしたかと思えば、モンスターは凍っていた。

「ごめんな、助けてやれなくて」

すると火炎ブレスを放ちモンスターを氷ごと砕いた

「よし、こちらはすんだな。ヒナタ、向こうが心配だ。行くぞ！」

「はい！」

そう言っているとクロスは自然な形でヒナタをおぶり、向こうへ急いだ。ヒナタがこの事に気付くまで時間がかかったが、それはまた後日

九話改造されし者の成れの果て (前書き)

遅れました。

## 九話改造されし者の成れの果て

クロスは嫌な予感がしたらしく、急いで元いた場所に向かうと、ここではリエン、エミイ、ガードの三匹？が教官達を護りながら、5、60体のPMと戦っていた。  
プロトモンスター

『グッ！』

『流石にこの数は』

『きついわね』

『キシヤアアア！』

しかし、まだ一体も倒せておらず、どんどん追い込まれていた

「ガード！敵の隙を狙って弱点に的確にプレス！」

『！？』

「リエン！その堅さは一体なんだ？その堅さを活かせ！」

『！-！』

「エミイ！尻尾から鱗を飛ばして隙を作らせろ！」

『クロス……なの？』



エミイがそうなるのは今のクロスに問題があった。現在クロスは頭がリオレウス、両腕がティガレックス、胴体と尻尾がナルガクルガ、足がグラビモス。という、以前とは全く違う力になっていたからだ

「そうだったらなんだ？」

「さっきと全然違う。それになんか吹っ切れた？感じがする」

「一瞬で片付ける。さっさと寝たい。さっき、いい感じになってたのに邪魔された」

色々な事を口走りながらクロスは普通では考えられない程の大きさのブレスを作っていた

「獄炎ブレス」

通常のブレスとは違う、真っ黒のブレスがPMに向かい

ズガンッ！

とてつもない轟音と共に消滅した

「すげえ」

「なに……………あの威力」

「これが……………」

エミイが言おうとしたことをクロスが言った

「改造された者の成れの果てだよ」

それでもあと8体残っており、その奥から白衣を着た人間が姿を表した

「あんたが死ぬように放った筈なのにな」

「死ななくて残念だったかい？ Z N o . 0 1」

「その名前で俺を呼ぶな」

静かに獄炎ブレスを放ち、白衣の男性は8体のPMを盾にした

「そうやって身を護ったのか。あんたは命をなんだと思ってたんだ！」

普段、あまり怒りそうもないクロスが怒った。それは後ろの三匹が驚いた

『短い期間だったけど、あんな怒りかたしたの見るのは初めて』

『『ああ（ええ）』』

「モンスターの命か？んなもの研究材料に決まっているだろう！」

「貴様あああああああ！」

そしてクロスが飛び掛かろうとしたとき、暴風が吹き、クロスの目の前にメイドがたっていた

「今は鎮まり下さい、ご主人様」

「……………クウ」

クロスは何かを呟くと倒れ込むようにメイドに体を預けた

「貴方様も、これ以上は私<sup>わたくし</sup>でも容赦は致しませんよ」

「恐い、恐い。今は一先ずこれで退散させてもらつよ」

すると轟音が鳴り響き、気が付くと男は消え、クロスは気絶していた

「クロスさん！……………と貴女は誰？」

ヒナタはクロスに駆け寄ると真っ先に聞いた

「わたくしはご主人様のパートナーでクウと申します。以後お見知りおきを」

「は、はあ」

そんなヒナタの耳元でクウは「私は、イヤンクックなんですよ」と呟くと、クロスを起こしに入る

「ご主人様、ご主人様。起きてください」

「……………何故いるか後できっちり説明してもらつからな」

「はい。それと、この街の外でドドブランゴが大量発生しているのを確認しましたが」

「それってフラヒヤ山脈でだろ？」

「はい」

「んゝ。少し寝さして？」

「だめです！」

「えゝ」

ヒナタはさつきクウが言った言葉でフリーズを起こしていたが、ハツとなり、クウに加戦する

「一瞬に寮を見たり、訓練の為のクエストをこなしましょう」

「それは解ってはいるが」

クロスはチラッとガード達を見る

「俺らは一応ハンターだからな。金も結構あるし、心配は要らんぞ」

「クウはどうするわけ？」

「それはご主人様と一緒にしますが」

やっぱりか

「それは許可出来ん」

「何ですか!？」

「そうやって今までお前は何個の卵を産んできた！」

「……………6個です」

「それってどうやって出来た？」

「わたくしが発情してご主人様を襲った為に出来ました」

「分かってるなら言うな。ちょいとお使いを頼みたいだけだから」

「お使いとは？」

「ティガとニヤルを連れてきて貰えないか？ティガは今後の対策と一緒に練って貰って、ニヤルには俺の腕の中にいるナルガクルガを鍛えてもらうからだ。そうそう、クリルは元気か？」

「もう育ち盛りの遊び盛りですよ」

「あのー、そろそろ話を終えた方が……………」

「そうだな。それじゃあクウ、頼んだぞ」

「はい、ご主人様」

「ガード達もまたな」

「ああ」

「元気でね」

「クロスから昔は感じられなかった力を感じる」

最後のリエンの言葉は無視をした。そうしないとややこしいからだ

「えっと、その、さっきの話に出てきた卵って？」

「クウが発情しちゃってさ、本能の赴くままに俺を襲って、出来ちゃったの。まあ、その内の5つが割れちゃって1つしか無事じゃなかったんだよ」

「そう……………なんですか」

ヒナタはクロスの間人じゃない発言の意味を少しだけ理解した

その後、ララとルイの2人と合流し、寮を見て部屋割りをし、掃除をしただけでも遅くなっていたのでハンター集会所でご飯を食べることはなかったが、訓練生とG級ハンターではやはりメニューが違っていた。

そしてご飯を食べたあと、明日に備えて、皆は寝た。ただ1人、目が赤くなっていたクロスを除いては……………

翌朝

「くガウ」

白い巨大な毛の塊……………クロスは目を覚ました。どうやら無意識に牙狼になっていたらしく白い毛の塊と化していた。しかも傍には

「むにゃむにゃ、クロスしゃん」

こんなことを言っ て何故か寝ているヒナタがいた。恐らく部屋を間違えたのだろう

「起きろ」

「ふにゃ？」

クロスはいつの間にか人間の姿に戻っていた

「あれ？なんでクロスさんが私の部屋に？」

「ここは俺の部屋だよ。どうだ？ぐっすりと眠れたか？白い触り心地抜群の何かを抱き枕替わりに抱いて寝たのは」

「ふえ！？なんで知ってるんですか！？……………狼さんになつてたんですか？」

「ああ。氣い抜いたら勝手にな」

「そうなんですか」

ヒナタが納得した瞬間！クロスの拳が何故か勝手に開いている窓に向かつて一直線にのびた

「『メテオパンチ』」

最低最悪の技を放ち、何故か窓にへばり着いていた物を遠くに飛ばした

「い、今は……………」

「気にするな。気にしたら負けだ」

クロスはそう言ってヒナタを連れて部屋をでた。ちゃんと窓の鍵を閉めてから



九話改造されし者の成れの果て (後書き)

次回は雪山に行つてクロスはその奥に……………

次回、『雪山に潜むもの』

## 十話 雪山に潜むもの

「お、ちゃんとティガ連れてきたんだな」

部屋からでてララとルイが出てくるまで待っていると、クウと謎の男性が入ってきた

「はい。ニアルさんは速攻でこちらに向かった筈ですが」

そう言つて辺りを見回すクウに爆弾発言をした

「さつき、勝手に窓開けてモンスター<sup>の</sup>姿のまま侵入してこようとしたから、『メテオパンチ』で吹き飛ばした」

それを聞いたクウは驚き、ティガは呆れていた

「またやったのか。で、ニアルは今何処に？」

「何でよりによってあの技なんですか！」

「クウの怒りも尤もだが、ティガ、ニアルはさつきから俺の左腕に引っ付いてるぜ」

クロス<sup>の</sup>左腕を腕を見ると猫耳ならぬナルガ耳を生やした少女がくっついていた

「えっと……………」

ヒナタは状況が読めずに戸惑っていた

「クウの紹介はしたよな？クウの横にるのがティガレックスのティガ。俺の腕を占領してるのがニヤルだ」

「ニヤル、さつさと離れてくれない？クリルを撫でられない」

「はい」

ニヤルはしぶしぶ離れた。クロスはクウの後ろにいたクリルの頭を撫でた

「えへへ」

クリルは嬉しそうに目を細めて控え目に笑った

「ご主人様。特殊クエストが来てます」

「こつちに来てまだ全然経ってないが、噂が流れるのは相当速いな」

「今回は雪山の奥地で暴れている二頭のモンスターの討伐が依頼内容です」

「……………親父とお袋？まさか！

「ヒナタ、ララ、ルイは至急に朝食を食べてきて。そのあと、ララはティガにルイはニヤルに乗って雪山に来てくれ。俺はヒナタを連れていく。教官には頼んでマフモフシリーズを用意させるから、急いで！」

クロスの予想だにしない慌てようにルイが聞く

「何でそんなに焦ってるんですか？」

「恐らく、暴れている二頭は俺の両親だ」

「「「!?」」」

三人は信じられないものを聞いたときの様な顔をした

「正気に戻しに行くんですね」

「ああ」

そのうち、ここまで幾つもの信じられないものを見てきたヒナタだけが対応出来ていた

「なんでヒナちゃんはそんなに普通にされてられるの!？」

「今更驚かないよ。だって昔、村を助けてくれた伝説のハンターはクロスさんだもん」

「え……………でも右腕が化け物だって話してたよね」

「このことか？」

右腕がティガレックスになっているクロスはそう言った

「本当の話だったんですね。貴方が人殺しの化け物だって話」

突如ララの口から不自然な台詞がでた

「誰が人殺しの化け物だ。誰も殺してないっちゅうの」

ララは疑いの目を止めない

「本当ですか？」

「約束するよ。それに、この依頼とララとルイとヒナタが此処を卒業したときには、俺は向こうに戻ろって考えてるんだからな」

「どういう………事ですか」

ヒナタは信じられない事を聞いた時の様な絶望した顔になっていた

「……………」

「なんとか言ってください！」

「ヒナタ。それまでにしてあげな。この人にだって都合はあるんだよ」

ルイはそう言った

「なら、いつそのことこの依頼が終わったら来るか？向こうに。歓迎するよ？その代わり、武器は駄目だけどね」

「いいんですか？」

「良いよ？別に困ることなんか無いし」

クロスは自分の背中を意識し始めた。しかしそれに誰も気付いていなかった

「とにかく、準備を終わらせちゃって！ヒナタは終わったら正門に来て。一緒に行くぞ」

「はい」

「後の二人はニヤルとティガが、モンスターの姿に戻って裏門で待機してるからそこへ行つて」

「「はい！」」

「それじゃあ再集合場所は雪山の拠点で！」  
ベースキャンプ

クロスはそう言う外に向かった

それから1時間、ヒナタが指定された正門に行くと、バーストバイクと赤髪に茶色の目をしたクロスと同じくらいの青年がいた

「えっと、誰ですか？」

「こっちの姿で話すのは初めてだよ。俺は佐藤修斗。クロスじゃない、向こうに居たときの姿だよ」

「えっと一応クロスさんですよな？」

ヒナタはそう言った。すると青年は苦笑して

「一応は酷いな。クロスで合ってるよ。でも、今は修斗」

「それじゃあ、よろしくお願いします！シュウトさん」

「ああ」修斗は軽くそう言ってから、バイクに乗った

「密林から帰ってきたときと同じようにまた後ろに乗って」

「はい。あの変な被り物もしなきゃいけないんですよね？」

「はは、ヘルメットの事ね。しなきゃいけないよ。俺が着けてあげるから安心しな」

ヒナタは後ろに乗って、修斗はヒナタにヘルメットを被せた

「しっかり掴まってるんだよ。かなりスピード出るから」

「は、はい！」

修斗の顔つきがかわり、真剣な顔になった

『バーストバイク、リミッター解放、秒速300キロだ』

『OKマスター。リミッター解放します』

ヒナタには理解できない言葉が次々と聞こえてきた

「しっかり掴まってるんだよ！」

そして修斗が同じ言葉をもう一度言っただけでヒナタが修斗に抱き付いて三秒。

「着いたよ」

修斗に声をかけられた

「ふえ？」

ヒナタは周りを見回した。確かにそこはドンドルマの学校ではなく、雪山のベースキャンプだった

「ヒナタは此処でみんなを待ってからティガに俺の居る所まで案内してもらいな」

「何処……行くんですか？」

「決着を着けに」

ヘルメットを外すとそこには普段のクロスが立っていた

「一人じゃ危険です！」

「俺はほぼ一人でG級ハンターになったんだ。なあに、死にはしないよ」

「それでも！」

「大量に発生してるドドブランゴの餌食になりたい？」「……………でも、でも！」

「俺は大丈夫だから。無事にヒナタが卒業出来たら一緒に向こうの



世界に行こうな。大丈夫、ヒナタなら我慢出来るよ。それに、俺は………」

人間じゃ無いから。

そう言い残し、クロスはベースキャンプを後にした。涙を流し、その場に立ち尽くしてるヒナタを置いて、この雪山に潜むものと決着を着けるため

「大体は退治できたな。やはり修斗の姿で正解だったな」

赤髪に茶色の目をした青年の足元には、大量に山積みになれた所々焦げたドドブランゴの死体が転がっていた

「後は………」

修斗はクロスになり、さらに雪山の奥へ足を進めた

数分前

「ヒナちゃん!」

ヒナタは、ハツとして上空から降りてきたララとルイを見た

「およく？ヒナちゃん、クロスさんは？どうしてヒナちゃんの目が赤くなってるの？」

「ララ、一気に質問しない。それにしても、それは僕も同じだ。クロスさんは何処へ？」

「大量のドドブランゴを討伐したあと、決着を着けに行った」

「確かに死んだドドブランゴの匂いはするな。どうやら、クロスは危険な所に行ってるみたいだ。そこまでは案内しながら、ボディーガードをしてあげるから、しっかり着いてきて。」

「今から行くところは、G級クラスじゃないと危険な場所だから」

## 雪山最奥部

『ぐおおおおおおお！』

『ぐぎゃあああああ！』

「完全に自我を失ってるな。父さん、母さん、今、助けるからね」

そしてクロスは後ろから気配を感じた。

「……………ディア……………なのか？」

クロスが後ろを振り向くとそこには一体のギアノスが立っていた

『貴方だれ？何者？人間は来てはいけない場所よ。って言っても通じないわよね』

「やっぱりディアだ。その声で確信できた。ごめんな……………戻ってくるのが遅れて」

クロスはそこまで言うとしニックブラストを放ってきたアカムトルムに「効かないよ」と同じくしニックブラストを放った

『戻ってくるのが遅れて？って、貴方は誰なの？しかも何で同じ技を放ってるの？その人たちを殺さないで！変な研究者たちに催眠されて……………』

「催眠を解けば良いんだな！」

『う、うん』

「あの時も、今回もちゃんと待っていてくれてありがとう」

『え……………貴方もしかして……………クロス？』

クロスは返事もせずに、またアカムトルムとウカムルバスに向き直った

「今、正気に戻してあげる。せめてもの親孝行だよ」

クロスの身体から紫色の光が溢れだし、収まったと思えばアカムトルムとウカムルバスは気絶していた

「クエスト完了……………」

クロスはそう言って倒れ込んだ。しかし、何か柔らか物の上に頭が乗った

「ディア？」

「やっと人の姿になれるように特訓したのよ？貴方に見せたくて」

「そうだったのか。ごめんな、ディア。少し寝させてくれないか？最近寝不足なん……………だ……………」

クロスはそう言った直後、すうすうと寝息がクロスから聞こえてきた。

「ゆっくりおやすみ、クロス」

ディアはそれを微笑みながらみて空を見上げた。普段は雪が吹き荒れている空が何故か晴れていた。

## 十話 雪山に潜むもの（後書き）

次回、ヒナタとディアがクロスを取り合います。正直、クロスは不幸な事に巻き込まれやすいです

## 十一話 異世界移動、修斗のいた世界へ

クロスが全てを終わらせ、倒れた頃、ヒナタ達は漸く雪山最深部にたどり着いた。

「そんな馬鹿な!？」

まず第一声を放ったのはティガだった。目の前には重ねて倒れる、白と黒の巨大なモンスター。そして、倒れたクロスと、そのクロスに膝枕をしている女性がいた

「マスター……………無茶し過ぎたよ」

ニヤルはそう呟いた。そして、決して後ろを振り向こうとしなかった。

何故なら、後ろからはかなりの殺氣が伺えるからだ。それは少なくとも1人。いや、確実に1人だけが放っている殺氣だった

「クロスさん、膝枕して貰ってるね」

ヒナタがそう言うと、周りがビクツとなった。ヒナタは満面の笑みを浮かべながら、殺氣を尋常ではない量を放っていたからだ。

少なくとも、その殺氣はクロスに向けてのものだろう

「……………ん」

何だろう、このとてつもなく嫌な殺氣は。

クロスは目を覚ました。しかし、それは十分寝たからではなく、殺気による危険感知で起きたのだ

「良く寝れた？」

「ああ。十分な」

クロスは嘘を着いた

「……………ハッ！」

クロスは飛んできたボウガンの弾を右腕で弾いた

「危ねえな。ヒナタは何をそんなに怒ってるんだ？ ん？」

クロスはいつの間にかヒナタの目の前に姿を現していて、ヒナタの顎を持ちクイツと上に向けた。クロスとヒナタの顔の距離はたったの2センチ足らずだ

「ひう」

急に目の前に現れて、こんなに顔が近いため、ヒナタは逆に怖がってしまった

「言えよ。何でハンターに向けて撃った。ヒナタがやったことは重大な違反だぞ！？まあ、相手がハンターだけではなく、化け物だったから良いが」

違う、違うよクロスさん。ヒナタはそう心で呟いた。

「ルイとララはすまんが、お互いに、ギアノスを5匹づつ狩ってきてくれないか？ルイにはティガを。ララにはニヤルをつかせるから」

クロスはそう言うのと別方向を向いた

「それは解ったが、ヒナタはどうするんだ？」

ルイはヒナタだけ言われていないのに気付いていた

「ヒナタには俺がつくよ。少なくとも俺となら安心だしな」

クロスは相変わらず別方向を見ていた。そこにコソコソ動く物陰があるのをクロス以外は気が付かずに……………

「倒し終わったら、此处に次元移動ホールを開いておくから、その時集合だ！」

クロスはそう言って坂を下り、白と黒のモンスターの所へ向かった。ヒナタもそれを追いかけて、四人はギアノスを倒すために移動した

そして、そこにクロスとヒナタとディアの三人になったとき、クロスは声を荒げて叫んだ

「そこで隠れてないで出てきたらどうだ？」

そして、クロスがずっと睨んでいた場所から白衣を着た男が1人出てきた

「そのギアノスから人間になった奴は非常に興味深い。研究材料として連れていくか」



「クロス。あの人よ、貴方の両親を狂わせたのは」

「そうか……………貴様が」

「ほお、その化け物二匹と知り合いなのか？」

そう言いはなった瞬間だった。クロスから信じられぬ程の殺気が発ちディアとヒナタの目の前に立った

「貴方……………一体」

「止めて！これ以上は暴走しないで！もう、クロスさんが暴走するのは見たくないよ……………これ以上暴走したら、クロスさんが死んじゃうよ」

ヒナタはひたすら叫んだ。ヒナタは此処へ来る前にクロスは自分の過去……………暴走した過去をヒナタに見せた。それはクロスが最も見せたくない記憶だった。しかし、クロスは見せた。ヒナタにはその意図未だに読めなかった

「ねえ、クロスが死ぬってどうということ！？」

もちろん、その言葉にディアは食って掛かった。しかし、ヒナタはひたすら泣きじゃくり、譫言の様に「もう…………やめて」て言い続けていた。

「確かに、暴走したら自分の命に関わるよ」

クロスはいつの間にか二人の目の前に現れて言葉を放つ

「それが普通の暴走だったら。でもね、闇の力や何かを守る力だったらずいぶん違うんだ」

「何かを守りたい。そう願いつづけて暴走するとね、時々暴走をコントロール出来るようになるんだよ」

「だから俺はお前らを守る為に力を使う。心配しないで。だって……」

あれから………暴走出来ないんだよ

クロスは最後にそう言った。そして、相手に突っ込んでいった。「貴様だけは許すわけにはいかねえよ」

「ふむ………では私はこれで失礼しよう」

「待て！」

クロスは叫んだ。しかし男は煙玉を使い視界を悪くしてその場を離れた

「……………」

「ん」

「目が覚めたか」

「我々は一体……………」

「軽く暴走してました。それを止めてました」

『貴方……人間！』白きモンスター……ウカムルバスはクロスに警戒し、そして臨戦態勢にまでなった

「……………」

瞬時、クロスの右眼が龍の物へと変化した

『一体、貴方は何者よ！』

『いい加減にしないか、クロス。何故喋らない。何か理由でもあるのか？』

黒きモンスター……アカムトルムはそう言つと、クロスは表情を変えず、ウカムルバスは驚きを隠せずにいた

『ねえ、あれが私達の息子だつて言つの！？』

「……………少なくともそうだ。父さんは見破るのが早くて仕様ががない」

『昔からだろ？それに、ちゃんと顔を見せに来るつて約束を守りに来たんだろ？』

「……………やっぱり父さんには敵わないな」

クロスは表情を変えずにそのまま突っ立っていた。そして、ウカムルバスは



『元気に行つてこいよ』

『長い間寂しくなるわね』

「いや、今までも長い間居なかったが………　　つてか時間を止めるから、寂しいって感じる間もないと思うけど」

クロスはバリツバリつつこんでいた

「やっと五体倒してきたよ」

「途中雪崩が起きたがな」

まずは何故かララとティガが戻ってきた。

………　　何故？確かララにはニヤルをつけたような気がするんだが

「此方も終わったよ」

「マスター！」

やっぱりルイの方にニヤルがいた。　　つてか飛び付いてくるな！

「離れる。邪魔だ。火山に放り投げられたいか？」

「む」

ニヤルは仕方なく離れた。

全員揃ったなそれじゃあ、イッツショータイム！

「我、時の旅人の名において、次元の狭間よ。開け！」

俺は高らかにそう叫んだ。すると目の前に次元移動の要ともなるホールが3つ程開いていた

「こんなに開く意味あったっけ？」

俺はその場で首を傾げてしまった。

（クロス：俺はララとルイとヒナタを連れていくから良いとして……ニヤルとティガは自分で移動出来たっけ。ちよつと待てよ？確かこの大きさだと大体三人までが限界。人数は俺を含め六人。つまり二人づつって訳か）

「ニヤルとティガは移動方法は熟知してるよな？」

「ああ」

「いつでも」

「ならニヤルはララをティガはルイを連れて中に入って移動を開始してくれ。移動先は同じだからその場で待機。……荒さないでくれよ、俺の部屋」

軽くボソツとクロスはそう言ってからヒナタを抱き寄せて

「それじゃあ、行くぞ！」

「はうう」

顔を真つ赤に恥ずかしがっているヒナタと共にホールに入り、ホールは閉じた。

「すまんが、あいつらより先回りするぞ」

「え？」

ヒナタにとっては今居る空間はとても変な感覚だった。重力を感じない……………無重力だからだ。だからどうやって進んでいるかも解らないのだ

「相当スピード出すからちゃんと掴まってるよ」

「は、はい」

ヒナタがクロスに抱きついた瞬間、物凄いスピードで空間を抜けたのだ。ヒナタは目も開けられず、クロスは眼を龍眼にしていたため、風の影響は受けなかった

「やはり、俺だけは最初に飛ばされた場所に出てくるか」

そう、クロスが居たのは、最初に飛ばされた場所。つまり、家の目の前に出てきたのだ

「ってか、こんなに近かったとは……………」

軽く啞然としながら家の前で立ち尽くしていたら、後ろから

「お兄ちゃん？」

ただ、その声がした。ヒナタは後ろではなく、クロスを見ると、顔を真っ青にしてギギギギと後ろを向いた。後ろには14〜5歳の少女が立っていた。

「きらら……………ただいま」

「2週間ぶりよお兄ちゃん。早く家に入りましょ？」

「あ、ああ」

クロスは心の中で、『あ、死んだな』と呟いていた。



## 十一話 異世界移動、修斗のいた世界へ（後書き）

それでは新キャラ、ドン！

名前・佐藤 きらら

性別・女

年齢・16（実年齢より若く見られがち）

趣味・料理

好きな物・ぬいぐるみと兄

備考・典型的なブラコン。修斗はクロスそのもうアタックをよく避けては居るがめげずにアタックし続ける

## 十二話 窓からの脅迫状。ギルドへの要請

「お帰りなさい、きらら。それと、修斗も」

「……………ただいま。母さん」

「お母さん、今日はお兄ちゃんの部屋に「来るな」え」

そりゃ即答するよ。このブラコンが

「そつちの子も入ってらっしゃい。どうせ、修斗に連れてこられた  
んでしょ？」

鋭いな、母さんは。

「あと4人来るから、夕飯の準備手伝うよ」

「お兄ちゃんは休んで！代わりに私がやるから！」

でしゃばるな、ブラコン。

「分かった。失敗するなよ？」

「分かってるよ」

きららは剥れてリビングへ入っていった。

「それじゃあ、クロスは部屋で休んでらっしゃい」

「相変わらず鋭すぎだぜ、母さんは」

「あ、あの〜」

「ヒナタちゃんも、クロスの部屋にいさせてもらいなさい」

「!!どうして私の名前を……………」

「初めから、俺がヒナタを連れて戻ってくるのを予測してたな？いつからだ？」

「2週間前からよ」

おいおい、飛ばされた日からかよ……………

「嵐雅は今どこに？」

「ああ、あの人は今はクロス、貴方の部屋に居るんじゃないかしら？」

なるほど。それなら荒らされる心配が無いわけだ

「あの。嵐雅さんって」

「過去に俺を襲ってきた、擬人化ティガレックス。今は俺を助けてくれる良いパートナーだよ」

「そう、なんですか」

「クロスよ、帰っていたのか」

「嵐雅、お前右腕どうにかしろ！」

目の前には黒髪、黄色の眼。そして、どす黒いティガレックスの右腕が目立った

「どうにかしろと言われてもだな。お前の部屋にお前の妹の侵入を防いでいた結果なのだが？」

「よし、ナイスだ！」

「あの、いつまでこの場所に居れば……………」

「そうだったな。それじゃあ、俺の部屋に行くか。あ、嵐雅は母さんを手伝ってくれないか？」

「クロス、お前のお陰でこの家は生活出来ている。前はクロスを襲った身でありながら、この家に置いてくれて感謝してる」

「高校生ながら、裏じゃ有名なギルドのギルドマスターなだけだよ。それに、今は今。過去は過去。振り返るな」

俺はヒナタの手をとり、自分の部屋に向かった

「修斗さん、あのお父様は」

「死んだんだよ。俺が守りきれなかった」

「え？」

「着いたよ」

俺は部屋の扉を開け、絶句した。

「「「「ZZZZ」」」」

「寝てるよ」

4人揃って、俺のベッドで寝ていたからだ

「起こしますか？」

「いや、起こさないで良いよ。適当に座ってて」

俺は本棚にあった1つの本を手にとり、机の上にあったPSPも持った。

「ヒナタ、この世界じゃ、ヒナタ達の世界は空想上の世界になる。これはそれを証明出来るもの」

クロスはヒナタに本を渡した

「モンスターハンター？」

「そ。モンスターハンター。って、いきなり天鱗出たよ。ついてるな」

「それは？」

「モンスターハンターポータブル2ndG」

「はあ」

俺はヒナタそっちのけでモンハンをやっていた。その時、隣の部屋からガラスが割れる音がした。

「なんだ!？」

「お兄ちゃん……………」

「何があった」

「窓から石が」

きららの指差す先に石が確かに転がっていた。「……………ギルドに連絡しろ」

「でも、何処のギルドに……………」

「『ドラグネス』に連絡しろ」

「でも、あそこは有名で依頼が通るまで1ヶ月はかかるって」

「俺が連絡する」

「番号は225・200だよ!」

「……………」

俺は電話の子機を手に取り、番号000-058にかけた

『ギルド・ドラグネス極秘番号です』

「俺だ。ギルドマスターのクロスだ」

『マスター！？一体何のご用件ですか？』

「ちょっと、脅迫状がな。今すぐ動ける奴は誰がいる？」

『それなら……………』

「リッシャが動けるだろ。どうせ暇だ！って言ってるからな」

『ご名答です。それでは今すぐそちらに向かわせます』

「頼んだぞ」

俺は電話を切った

「きらら、すぐ来るってよ」

「うそ！？」

「うそじゃないよ。『ピンポーン』……………もう来やがった」

「え！」

因みにヒナタはマンガに夢中になっていて4人は寝ている

「すみませーん！ギルド『ドラゲネス』から来ましたリッシャです」

「久しぶりだな、リッシャ」

「あんた誰？」

リッシャがジト目で見てきた。

「おいおい、まさかギルドマスターの顔を忘れる奴は居ないよな？」

「ギルドマスター？……………マスター！？」

「やつとか」

「それで、マスターが直々に依頼なんて前代未聞だよ？」

「そう言っな。これを見てくださいれば分かる」

俺は石に付いていた手紙をリッシャに渡した手紙には

『キララチャンニ、チカヅクナ。チカヅイタラ、コロス』

と書かれていた

「確かに異常っすね」

「承けてくれるか？」

「分かりました。この依頼、リッシャ・ロールが承りました」



「お兄ちゃん？」

そんなタイミングで二階から、きららが降りてきた

「手紙にあつた子はこの子っすね」

「ああ。因みにきらら、あれはいつ頃から起きた続けてるんだ？今日だけじゃないだろ？」

「大体、1週間前からだよ。窓に石が投げつけられたり、ストーカーされたりもしたの。もう怖いの」

きららは俺に抱き付いて我慢していたのか泣き始めた

「大至急頼むぞ」

「はいっす！」

リッシャはそのまま家から、出ようとした。

「まだ帰って良いとは言っていないぞ、リッシャ」

「なんすか？」

「せっかくだから飯食ってけ。どうせ母さんが予想して多く作ってる筈だからな」

そして俺はヒナタ達を呼びリビングで飯を食った後、リッシャは帰り、俺達は寝た。

「時期的にもうそろそろきららの学校の授業公開の日だが」

「そうね。用心した方が良くから修斗、頼めるかしら」

「ああ。父さんを守れなかった分、全力を注がせてもらっよ」

「うふ、頼もしいわね」

母さんはもう寝ろよ。いつも早く起きてるんだろ？

そうね、そうさせてもらっわ。お休み、修斗。

「ああ」

俺は徹夜を決意した

### 十三話 修斗激怒！ 怒りの青龍化

きららside

「ん……………良い匂い」

私は良い匂いがしてそれに気付いて起きた。時間はまだ、午前5時30分。時間的にお母さんはまだ寝てる。誰だろう。昨日きた人達の誰かな？

「きらら、起きたか。少し早めの朝食でも食うか？」

お兄ちゃんでした。私の大好きなお兄ちゃん！

「食べる！」

お兄ちゃんの料理なんか久しぶり！

クロスside

「きらら、起きたか。少し早めの朝食でも食うか？」

起きてきたのはきららだったか。

「食べる！」

元気が良いな。おっと、何故きららが俺の事を好きなのか、一応話しておこう。

俺はきららが産まれる前にこの家に拾われた。つまり、きららとは血の繋がりが無いんだ。そして、拾われた時に俺がどういう存在かをこの家にいる、母さんと今は亡き父さんに話したんだ。

どうせ、怖がられると思っていた。けど、違っていた。父さんと母さんは俺を自分たちの息子だと言ってってくれた。

嬉しかった。父さんと母さんの言葉が。俺は当時8歳だった為。父さんにすがり付いて泣いた。

そして、この家の家族を、生きている人々を守りたい。その気持ち、ギルド『ドラグネス』を結成するきっかけとなった。父さんはきららが物心つく前に強盗に殺された。もう少し俺が来るのが早ければ！って自分を責め続けた。

けど、母さんはそんな俺に「自分を責めないで。貴方はよくやったわ」とそう言うてくれた。しかし、母さんは涙目で俺は心が痛んだ。そして、俺は18になり、この世界から去るつもりでモンハンの世界に飛ばされた。しかし、また戻ってきてしまった。俺はどうやらどの世界も捨てられないらしい。ま、自分らしいな。

そして、きららは俺が血の繋がりが無いことを知っている。そのせいなのか、今まで控えめだったのが、いつの間にか、重い求愛行動へ移行してしまった。言うんじゃないかった。

「お兄ちゃん？」

きららが不思議がりながら俺の顔を覗く

「ほら、早く食べないと冷めるぞ」

「はい」

「そして、何時から腕にくっついてた？」

「30秒位前から？」

「離れる」

「嫌〜」

このやりとりはきららのものではない。ニヤルとのやりとりだ。ニヤルは擬人化した姿を持ったナルガクルガで隠密、空蟬に長けている。

だから油断をしていると、いつの間にか腕にくっついてるなんて事があるのだ

「そういや、今日ってきららの学校の学校公開じゃなかったか？」

「そうだよ。よく覚えてたね。お母さんも忘れてたのに」

母さん、娘の行事くらいおぼえてようや

「そろそろ準備しろ」

「うん！少し待っててね」

さてと、ニヤルを離しにかかりますか。

「神速・閉走！」

見事に俺の姿が消えニヤルから離れた。

「なんで逃げられるの？」

「神速・閉走は自分を細胞レベルまで分離。そこから再構築したんだよ」

そんなに多用は出来ない。自らの身体を傷付けてやっているからな。今日の授業公開、嫌な予感がするな。

「準備終わったよ」

制服に身を包んだきらが下りてきた。

「外で先に待つてな」

「うん！早く来てね！」

「ああ」

そしてきらが玄関から外に出た瞬間だった。

「今日、隠密で俺を尾行してくれ」

「なんで？今まで嫌がってたじゃん」

「今日はなんか嫌な予感がするんだ」

「嫌な予感？」

「だから、他の人達にはれないようについてきてくれ。他の奴等には、レオが説明するから、ニャルはこっちに専念してくれ」

「わかった」

俺はそれだけを言うと、玄関の外で待っているきららの所へ向かった。

「お兄ちゃん、遅いよ」

「すまん。それじゃあ行くか『ブレイクバイク』！」

俺はそう言つて、カードの姿のブレイクバイクを地面に置き、バイクになるのを待った

「バイク？」

「そ。これだつたらすぐに着くだろ？」

「うん」

きららを後ろに乗せ、ヘルメットを被り、バイクのエンジンをかけた

「行くぞきらら」

「うん！」

中略

10分後

「きららの通ってる高校って……………」

「女子校だよ。どうかしたの？」

「いや……………何でもない」

そこに二人の女子が来た

「きらら、おはよ」

「今日の授業公開、恥ずかしいよね。親とか見られたりするんだから」

「私は平気だよ！だって……………」

ん？俺の方を見てる。顔に何かついてるか？

「ねえ、あそこのかっこいい人誰？」

「何かのモデルさんかなあ？」



「私のお兄ちゃんだけど」

「きららってあんなかつこいいお兄さん居たの!？」

「うらやましい」

何か賑わってるな。

「きらら、時間は良いのか？」

「あ、ありがとお兄ちゃん。また後でね」

「ああ。また後でな」

俺はきららと別れて、保護者受付に行った。

「えっと、それじゃあこちらに名前と誰の保護者、もしくは兄弟かをお書き下さい」

名前は佐藤修斗っと。きらら、きらら………あつた。

俺は無事受付を済ませ、きららのクラスへ向かった。

「ねえ、あの人誰だろう」

「きららのお兄さんらしいよ」

「きららは良いなあ。あんなかつこいいお兄さんがいて」

何か色々聴こえてきたが、無視で。そして、嫌な予感が当たってし

まった。それは3限目の時だった。歴史学を教えていた教師が、皆がわかるはずもない青龍文字を書いたのだ

「それではこれがわかる人いますか？」

周りはざわつき、「親がいるからわざとだよ」とか「自分でも解つてないくせに」とか聴こえてきた。

「親御さんの中に解つた人はいますか？」

こつちに矛先を向けんな。……………少し、いじめてみるか。

「はい」

「それではそこのお兄さん。こちらへ」

俺は黒板の所まで歩いていった。途中「無茶だよ」とか「恥かかれちゃうよ」とか言われたが、あんな簡単な文字、解らん訳がないだろう。

「それでは、これと同じ文字で答えを書いてください」

なめるなよ。青龍神を……………

「これでいいですか？」

「……………途中までは読めますが、そこから先が読めませんね」

「当たり前です。古代青龍文字で途中まで書き、後半は中世青龍文字で書いたんですから」

「も、もういいでしょう」

俺は席に戻る前にきららにウィンクして後ろに戻っていった

そして、4限目は体育で、参加出来る父兄はご参加下さいとの事だったので、参加をし、きららの元へ向かったきららは朝あったあの二人と一緒にいた。

「きらら」

俺が呼び掛けるとすぐさま反応し、飛び付いてきた

「お兄ちゃん、良くあれが解ったね！」

「伊達に青龍やってないよ」

きららに聞こえるか聞こえないかの声で言った

「え？………今、なんて？」

どうやら聞こえちまったみたいだな

「伊達に青龍やってないよ」

「お兄ちゃん、青龍もなの？」

「そうだな、後は朱雀と玄武と白虎が親友だったりするな」

「お兄ちゃんって凄いね」

「まあな」その時。先生が皆に「それでは四人一組になってください」と言った

四人一組か……………ちょうど四人だな

「ねえ、ちょうど四人になるから一緒に組まないか？」

すると二人は固まった。表情は驚いた顔をしていたため、俺から話し掛けられるとは思ってもなかったのだろう

「こっちのお兄ちゃんより赤髪のが名前が真奈美で、こっちの目がライトグリーンのが由美だよ」

状況を理解してか、きららが説明して、名前も分かった。

「よろしくね、真奈美ちゃんと由美ちゃん」

「よ、よろしくです」

「あうあう」

真奈美ちゃんは緊張して拳動不審だし、由美ちゃんはあうあう言うてるし

「なんか、このメンバーで大丈夫か不安になってきた」

「大丈夫だよ！……………多分」

最後の多分は何！？怖えよ！

「競技はリレーです。走る順番を30秒で決めてください」

30秒って……………幾らなんでも無茶だろ。

「順番はトップバッターはきらら、その次は由美ちゃん、三番目は真奈美ちゃん、最後は俺で良いね？」

「大丈夫だよ」

「大丈夫です」

「あうあう」

「由美ちゃん。リラックスして。大丈夫、ちゃんと出来るよ」

「はい！」

しかし、このリレーで事件が起きると思わなかった。

「トップバッターの人はスタートラインにならんでくださいーい」

いよいよ始まるみたいだな。

パンツ！と乾いた音が響き、リレーが始まった。きららは健闘するも3位、そして由美ちゃんが1人抜かして2位になり、真奈美ちゃんが抜かされ続け、現在最下位。トップになるには10人抜かさなければならぬ。

「やっちゃんいけないんだけどな」

俺は軽く秒速2kmという化け物並みのスピードを出し、10人を軽く抜いた。

「楽勝」

俺はゴールの手前で立ち止まり、歩きながらゴールした。

「一体なにをしたの？」

由美ちゃんに聞かれた。どうやら俺には敬語は使わないみたいだ。俺もその方が気が楽で良い。

「本当は内緒にしなきゃいけない話だけど、他の人には、きららにも話さないでくれないか？」

「わ、分かった」

この子になら、話しても良いよな。「実はな、俺は生まれつきの特異体質なんだよ」

「特異……………体質？」

「そう。俺の生まれつきの体質で背中に……………翼があるんだよ」

「羽根がですか？」

「まあ、呼び方は人それぞれだからね。そうだよ、生えてるんだよ」

「それで、羽根とあの速さと何の関係が……………」

「羽根は閉じてても身体を少し浮かすぐらいは出来るんだよ」

「走っている最中に自分の重さを感じない。だから速く走れたんですか？」

「こ名答。賢いんだね」

「そんな、全然ですよ」

俺が由美ちゃんとそんな会話をしていた時だった。

『マスター！今すぐ理由は聞かずに校舎の中へ避難を！』

「由美ちゃん。今すぐ校舎の中へ避難してくれないか？」

「？はい……………」

由美ちゃんが校舎に入るのを見たあと、俺は外にいた人達を校舎の中へ避難させた

「おっと、お出ましか」

目の前には、真っ黒なドスランプスが立っていた

「まずは小手調べか。嘗めやがって。良いだろう、ギルド『ドラグネス』ギルドマスターとしてではなく……………」

おれの周りの空気が変わり、ドスランプスは怯え始めた

「…………ただ荒ぶる、理ことわりを外れた、双龍の力で殺ころってやるよ！」

その時だった、1つ誤算が生じた

「ひう」

きららが校舎にはいつていなかったことだ

『ギャツギャ！』

ドスランポスは俺の目の前できららを校舎へ突き飛ばした。その時、暴走出来ない俺の中で何かが弾け、意識を失った。

突き飛ばされたきららはニヤルによって直撃は免れた。きらら si  
de

一体何が起こったのか私には分からなかった。いきなり身体を突き飛ばされて何かに助けられて…………

「お兄ちゃん！」

私が叫んでお兄ちゃんの方を見ると、さっきの黒い怪物を食べている(…………)龍が目に入った。

「なに…………あれ」

私は目を背けたかった。だって、あれが自分の兄だって信じたくはなかったからだ。

「暴走しないはずなのに暴走してる。妹を傷つけられたから、それ



で本能が目覚めたのかも」

私を抱き抱えている黒い化け物がそう言っていた。

「ひっ！」

私は怖くて、逃げようと思った。けど、動かなかった。

「……………もう。声を聴いて分からない？」

このソプラノのハスキーボイスは……………

「……………ニャルさん？」

「当たり前。今は貴方の兄を止めることに専念しましょう。昔、聞かされた事があるの。マスターは青龍で暴走するとそれまで過ごした記憶を失うって」

そんな！それじゃあ、お兄ちゃんは記憶が無い……………

私は絶望した。そして、綺麗な碧の青龍の身体は、怒りに身を任せ  
ていた為に、紅くなっていた。そして周りに沢山、さっきのような  
怪物が現れた……………

## 十四話 取り戻した記憶。霸剛龍への進化

修斗 side

俺は一体……………俺は誰だ……………

「グオオオオオオオ！」

目の前の虫けらを次々と尻ぎ払う。邪魔だ！消え失せろ！

『ナゼ、アバレル。ドウシヨ』

同士？俺はこいつらの仲間なのか？

『イツシヨニ、コノセカイヲコワシ、ワレラガコノセカイノシハイ  
シヤトナロウ』

分からない。……………俺が何者かが。この世界を壊し、我らがこの  
世界の支配者に……………か。俺はこいつらの……………

ドンッ！

何だ、後ろに何かが抱きついて……………

「駄目だよ」

？

「駄目だよ。お兄ちゃんが居るべき場所はそのじゃないよ」

俺に少女が抱きついていて。俺の居るべき場所……………

『ジャマダ！コムスメ！』

キヤア！少女は俺の身体から吹き飛ばされていた。しかし、すぐに起き上がり、俺にすがり付いてくる。俺は何故か少女を護りたいと思ってしまった

「お願い。お兄ちゃん……………私は、絶対にお兄ちゃんを……………」

少女はそこまで言って気を失ってしまった。……………思い出せ。……………俺の護りたい物を。そして、この少女の事を！

俺の体が光り、紅から碧に戻り、更に光った

「ごめんな。きらら」

俺は人間に姿を戻した。

「ニヤル。きららを頼む」

「本当にマスターなのですか？」

おやおや？ニヤルにしてはやけに慎重だな

「ああ。きららのおかげってやつかな。記憶もちゃんとある。心配かけたな」

こう悠長に話している最中でも、奴等は攻撃を仕掛けてくるので、それを避けながら俺はニヤルにきららを預けた。

「誰が同士だ。バーカ」

『チツ！ヤツチマエ！』

相手の数は5000。あの姿を使ってもお釣りがくるな。

「俺がこの姿を使うのはお前らが初めてだ」

そう言っただけのまわりを風が包み、風が晴れたとき、そこに立っていたのは、覇龍アカムトルムの体にあつたラインが全身にあり、色は崩龍ウカムルバスに似た色、そしてその2体には無かつた翼が背中に見える、大きさは人間位の大きさ。

銀色の甲殻に身を包み、尻尾は3メートルあるかもしれないというながさ、顔はリオレウスに似てはいるが、明らかにリオレウスと

は違う顔。そんな異様な姿の龍がモンスター目の前に降臨していた  
「覇剛龍アカムルバス。俺のこの姿は闇に染まった時になら何度か  
なっていたが、それ以外の時は初めてだ」

覇剛龍は普通の龍とは違い、人の形をしており、更に翼を4つ生えている。

「これで終わりだ『ソニックバーストブラスト』！」

俺の口から強烈な風の刃が吐き出され、5000もの軍勢を切り刻んだ

「暴走が俺を変えた。だから、暴走をしないなんてあり得ない。幾多の世界を護る。それが今の俺だ」

そつ。今のでこの姿を物にした。「さてと、リッシャを後で殴るか。………この姿で」

おそらく、もうストーカーの被害は無くなるだろう。何せこんな兄が居るんだからな。

それから二時間。無事に授業公開は終わり、甲殻も更に堅くなり、堅殻になっていた。実を言つと右腕だけがどうしても戻らず、放置したのだ。手は手袋をはめ、腕は包帯を巻いた。

「腕、大丈夫？」

「大丈夫だよきらら」

正直、大丈夫ではない。ヒナタに見つかったら、大変な事になる。

「おかしいよ。私が気絶した後何があったの？」

ずっところやって聞いてくるから困ってしまったている

「だから何もなかったから」

実は右腕の事をきららに話していない。

「む」

むくれてしまった。こうなったら、スルーが一番効果がある

「家に着いたぞ。早く入ろう」

俺はそう言ってきららを置いて先に家に入ってしまった。

「お帰りなさい、クロスさん。腕、どうかしたんですか？」

「いや、何でも無いよ。ヒナタ」

俺はそのままリビングに入って、母さんの部屋に入ってしまった。

「それで」

「腕がこうなっちゃったよ」

「ねえ、向こうに母さん達を連れていくって事は可能？」

「可能だが……って、まさか！」

「そのまさか」

「この家とかどうすんだよ」

「それは、貴方のギルドの誰かに貸し出せば良いじゃない」

「……………ちょっと良いか？」

「私が電話して修斗が向かうのを話しておくわ」

「未来を見るなよな」

「別に良いじゃない。『デッドアサルト』さん？」

「はあ、分かったよ『クイーンアサルト』向こうで無双するのは止めてくれな」

そして、母さんと話を着けた俺は、玄関へ向かった

「何処かへ行くんですか？」

「ヒナタ、ニヤルとティガに”準備しろ”って伝えてくれないか？」

「はあ……………分かりました」

「それじゃあ少し行ってくるから」

「行ってらっしゃい」

俺はヒナタに見送られ、最初の目的地……………由美の家に向かった。

「貴方のお母さんから話は聞いてるわ」

そう玄関で言ってきた女性に見覚えがあった。否、間違える筈がない！

「リーラ・セルラ。いや、今はリーラ・ホーレスって名前だっけか？」

すると、彼女は身構えてこう言った

「貴方はだれ？まさか、向こうの刺客？」

俺はそう言われて、一瞬呆氣にとられたが、爆笑していた。「私の問いに答えなさい！」

すると、彼女は俺に迫ってきたので、後ろに下がり

「チーちゃん心配してたよ。リーちゃんとセツちゃんを。そう言う俺も心配したんだぜ？」

「何故、その呼び方を……………貴方は、あり得ないけど、クーちゃんなの？」

「あり得ないって……………結構傷付くぞ。俺の名前は佐藤修斗であり、クロス・ライトでもあるんだよ」

「やっぱり、疑ってごめんなさいね」



「他人行儀は止めてくれ。セルドは家の中に?」

「ふふ。そうよ、家の中よ。まさか娘の友達の兄が、かつてのPTメンバーだなんてね」

「それは俺も同じ。それで用件何だけどさ」

「すぐに準備をしよう。家は300年空けてたって問題はないぞク  
ーちゃん」

「話が早いやセツちゃん」

「何か私だけ除け者ね」

「そんなこと無いぞ、リーラ」

「次の所に行ってくる」

「真奈美ちゃん家か。彼処も向こうの知り合いが親をやっているぞ」

「真奈美ちゃんから感じたけど、まさか……………」

「そう。ロウと羽弥が真奈美ちゃんの両親だよ」

「行ってくるよかつてのPTメンバーさん。向こうでチーちゃん待  
ってるよ」

「ああ」

「気をつけてね」由美ちゃんの家からそう遠くない位置に真奈美ちゃんの家があった。そして家の前では見覚えのある人が1人立っていた

「羽弥」

「久しぶりですね。一度もクロスの事を忘れたことはありませんよ」

「おいおい、羽弥。俺だってクロスを忘れたことは無いぞ」

「ロウ」

「久しぶりだな、クロス。まさか娘の友達の兄が、お前だったとな」

「羽弥はすっかり人の体に馴染んだみたいだね」

「ええ。ロウに告白出来たのも、貴方がこの体にしてくれたおかげですね」

「クロス、俺からも礼を言わせてくれ。お前のおかげで羽弥と結ばれた。以前、礼を言う前にお前は消息を絶ったからな」

「……………俺が言いたい事は分かってるよな？」

「久々に戻って親孝行しないとな」

「それに、貴方が私達の前に姿を現した時は、向こうに永住するつもりでしたしね」

「話が早くて助かるよ。準備を含めて、1週間後の佐藤家の前に来てくれ。100人が通れるほどのゲートを開いて待ってるぜ」

俺は用件を伝えて家に帰った。「ただいま」

「こっちは既に準備は済んでいるぞ」

「話が早い。先に二人を向こうに返す。その時、向こうの時間が動いて、こっちの時間の流れとリンクするから、1週間後にドンドルマでゲートを開く。その時の固定を手伝って欲しいんだ」

「了解です。マスター、向こうで待ってますよ」

「ああ」

俺はゲートを開いて二人を向こうに送った。後は、1週間後！

十四話 取り戻した記憶。霸剛龍への進化（後書き）

みんな一斉に向こうに送っちゃえ！

ってな感じで次回！

『いきなり卒業試験！？』

遅れてすみません。

## 十五話 いきなり卒業試験！？（前書き）

やっと書けました。少しスランプになりかけていたので

## 十五話 いきなり卒業試験！？

あれから1週間が経った。きらら達は学校を転校という形になった。真奈美ちゃんと由美ちゃんの両親は俺の知り合いであり、向こうの住人であったため、説明が楽だった。

「みんなの準備が出来たみたいだな」

「いつでも」

開け、次元の扉よ。時の旅人の名の元に！  
目の前に次元を繋ぐ穴が出来た。

「なるべく速く入ってくれ。この穴に入ったあと、抜けた先で待機しててくれないか？その際、セルドとリーラはチーちゃんに会いに行ってやってくれ」

「分かった。クロス、この世界ともお別れだな」

……………近いうちにこの世界とモンハンの世界がくつつく。それだけは避けないと

「さあ！行こう！モンハンの世界に！」

みんなが入ったのを確認してから次元の穴を閉じた。

「やっぱりドンドルマに出てきたか」

穴をでた先に有ったのはハンター育成学校だった。

「お兄ちゃん、ここは？」

「きらら達は知らなくていい。羽弥、ロウ、みんなをポツケまで連れていってくれないか？俺はまだやることもある」

「分かった。頑張れよクロス！」

「ああ」

こうして、この場に残ったのは、ヒナタ、ルイ、ララ、俺、ニヤル、ティガ、そして母さん。………母さん！？

「……………何故母さんがいる！」

「あら？別に良いじゃない」

「きららはどうする！」

「お兄ちゃん？」

きららまでいるのかよ！

「言っておくが、二人を養っていくとなると、80年で金が底尽きるぞ！」

「なら良いじゃない。かなり先よね」

確かにそうんだけどさ。

「その上ヒナタやルイやララまで面倒みるとなると、50年。少しまついな、武器や防具の整備もあるし、何年持つか……………」

そこでヒナタが食い付いてきた。

「ちょっと待って！私達の面倒ってどういう事！？」

「あゝ。今からヒナタ、ララ、ルイには育成学校卒業試験を受けてもらう」

「「「！？」」」

三人が驚いた顔をした。

「もちろん、俺も居るから安心しろ。相手はドスランポスだ。そいつの討伐が出来れば、育成学校を卒業、しばらくは俺が三人の師となり鍛えていくつもりだ」

「それじゃあ……………」

「俺と一緒に居れば、学校より、より多くの物が実践で身に付くぞ。学校は知識だけしか付けさせないからな」

「村はどこですか？」

ララが質問してきたので答えることにしたのだが……………

「おそらく、ポッケだろう。俺とリーラとチリーも同行させてもらおう」



「マジかよ……………」

後ろからセルド、リーラ、チリーの順番でやって来た

「チーちゃんは学校ほつといて良いのかよ」

「しばらくは大丈夫だから安心して良いよクーちゃん！」

安心出来ねえよ

「母さんは俺達が帰ってくるまできららと待機！ハンターじゃないんだから戦力外でしょ」

「きららはともかく、私は腕は鈍ってないわよ？」

……………『クイーンアサルト』め、隙がない

「チーちゃん」

「分かったよ。何としても阻止すれば良いんだね」

「気を付けろ、母さんは俺並みに強い」

「なら、あしらい方はクーちゃんみたいにやっていいね」

「ああ」

「それじゃあ準備を「みんな出来てますよ」分かった。なら……………全力疾走でクエストに行くぞ！」

「「はい！」」

聞き分けの良い子達で助かったよ。

それから色々ゴタゴタがあり何とか母さんを撒いた。

そして今は密林にいる。目標はドスランポスだ。あの力を試す良い機会だ。

「……………」

密林の様子が変だ。まるで、何かを警戒するような気配が漂ってる……………  
イッタイ、ナニガ……………

「どうしたんですか？」

「いや、何でもないよ。ちょっと話があるから、こっちに来てくれないか？」

「？は、はい」

……………もう覚悟は決まったんだ！

「俺な、自分の戦いが近いうちに終わりそうなんだ」

「自分の戦い？」

「そう。俺を改造した科学者を抹殺するっていう、自分の戦い」

「……………」

「それが終わったらなんだけどな、真剣な話だからな」

「はい」

「ヒナタ……………結婚してくれないか」

「……………え？」

「ちゃんと聞き取れなかったか？」

「い、いえ。……………幸せにしてくれますよね」

「ああ」

「だったら、喜んで」

「ありがとな……………ヒナタ」

ヒナタを抱きしめながら自分のもうひとつの戦いも終わりを告げることに薄々感付いていた。……………時の旅人という自分の戦いの最後が。

「いたぞ。ドスランポスだ」

確かにドスランポスはいた。しかし、様子がおかしかった。何かから逃げている様な様子だった。すると、空から異様に黒いリオレウスが降りてきた

「……………三人はドスランポスを。なぁに、お前らなら出来る

さ。俺はあのリオレウスを食い止める。良いか、討伐したら絶対にここに帰ってくるなよ」

「そんな……………クロスはどうするの？」

「ヒナタ……………必ず戻る。約束を果たさないといけないしな」

「ドスランポスを討伐後、ドンドルマに戻り、学校を卒業。その後、俺のかつてのPTメンバーだった、三人がいるはずだから、その三人とポツケに向かつて」

ヒナタは最後まで駄々を捏ねたが、承諾してドスランポスを追った

「さあ、予定は狂ったが、試させてもらっぜ」

すると、もう既にリオレウスは臨戦態勢に入っており、俺の目の前まで走ってきて……………止まった

「……………まさかな。もしかして、リオッドか？」

逆光で蒼い鱗が黒に見えていた。リオソウル、リオレウスの亜種で、リオレウスより力も強い。

『懐かしい臭いがしたと思ったら俺の名前を言い当てた。誰だ？』

気付いてないのかよ！

「リアナは元気か？お前、俺から離れて群れに戻ったんじゃないのか？」

『……………風の噂を聞いて、あんたが帰ってきたって聞いて。頼む！群れが大変なんだ、助けてくれ！』

「どんな風に変なのか聞かせてくれないか？」

『群れに戻ってから、リアナと二人、仲良く暮らしてたさ。けど、どす黒いリオレウスが現れて、群れを独裁し始めたんだ』

「……………」

『それで、風の噂を聞いて俺は群れを抜け出し、マスターであるクロスに頼みに来たんだ。群れを助けてくれって』

「助けるには条件がある」

『な、なんだ』

「リアナを絶対に前以上に幸せにすること！それだけだ」

『ああ。そういう条件だったら喜んで飲むぜ』

これで良いんだ。

しかし、ここで誤算が生じた。ヒナタが戻ってきてしまったのだ。

「クロス？」

「……………戻ってくるなって言った筈だが」

「でも」

「必ず戻るって言ったよな？」

「……………」

「今からリオ系統の群れに行ってくる。ここにいるかつての相棒の頼みなんだな。戻ってきて、ヒナタ達を立派なハンターにして、俺の戦いが終わったら……………」

俺は思いきって言おうとしたが

「その先はさっき聞いたよ？それに、必ず帰ってきてね、ポツケ村に」

「ああ。行くぞ、リオッド！」

『ああ！』

リオッドは俺を背中に乗せ、飛び出した。目指すはリオ系統の群れだ

**十五話 いきなり卒業試験！？（後書き）**

ここから先はしばらくクロスのソロになります。

相変わらずの亀更新ですが、温かく見守ってください

十六話 因縁のぶつかり合い、黒リオレウスVSクロス&リオ6種

「群れには後どのくらいで着く？」

『もうそろそろだ』

..... 此処は、幻の谷。俺がかつて住んでいた谷。そして、暴走した俺が村を焼き尽くした場所.....

「うつ！」

『頭が痛いのか！？』

「ち.....が.....うつ.....嫌な記憶が目覚めただけだ」

『嫌な記憶？』

「かつて、此処には龍の力を持った人々が住んでいた村があった」

『知ってる、その昔話は。でも信じられないぜ、1人の少年が暴走しただけで村が無くなるなんてよ』

「その少年は自分のしたことに絶望し、命を絶とうとした。けど、かなわなかった。谷に来ていた1人の女性に止められたからだ」

『ちょっと待て。今の部分、俺たちは聞いたことがないぞ』

「女性は言った。『強くなりたいか』と、少年は頷いた。こうして



少年は女性に着いていき、谷から姿を消した」

『……………群れに着いたぞ』

俺はまた……………戻ってきてしまったんだな。

『リオツドー!』

『リアナ。あいつは』

『まだ動きは無いわ。長老様はゴールドルナとシルバーソルに協力をしてもらおうとしてるんだけど、全然駄目で』

……………俺がやるしかない……………

【グオオオオオオオオオ!】

俺は吼えた。かつての自分の様に、自らを変えるために、リオツドから離れ、群れから少し離れた場所……………かつて自分が住んでいた村が在った場所で

『今の咆哮は一体……………』

「来いよ。こっちは準備は出来てんだよ!」

俺は空に向かってそう言った。刹那、漆黒の火竜がその巨体をゆっくりと地上に預けた。

『人間か』

「だったら何だつてんだよ。俺を喰うのか？お前には無理だよ。お前に俺は殺せない」

『貴様など喰ったところで腹の足しにもならんわ』

「ああ、そうかい。なら、『青龍族の力を思い知るがいい』！」

俺はそのまま武器を出さずに漆黒火竜に突っ込んだ

『青龍族？……………そうか、貴様は昔、この滅んだ村の生き残りか！』

『正確には俺が焼き尽くしたんだよ！』

言葉は龍語になり、右腕が青龍になり、相手を引き裂こうと迫った

『甘いわ！』

そのタイミングで横から尻尾が飛んできて俺を吹き飛ばした

『がはっ！』

ズザザーッと音がして不恰好ながらも着地をした。

『あ、あれは！』

どうやら、他のリオ種に見つかったみたいだな

「厄介なことになりそうだ」

『言語を戻したか』

「別にどっちでも良いけどな」

それはただの強がりだった。さっきの攻撃で立っているのがやっとだった。どうやら戻ってきてからまだこの世界に身体が適応出来ていないらしい。正直、身体が軋んでいた

『クロス！』

『え……………？マスター！？』

「リオッド！リアナ！来るなああああ！」

俺はやっと動く体をフルに動かし二匹を突き飛ばした。その瞬間、奴からのブレスをもろに食らってしまった。

「ぐああああああ！」

『マスター！』

『貴様ああああ！』

『ふん。つまらん、もう終わりか』

……………もう、我慢はしないぜ？

瞬時、空気が変わった。否、俺が変えたのだ。強烈な殺気と共に

『クロスなのか？』

「グオオオオオオオオオ！！！！！」

『暴走したか。それぐらいでこの儂が殺せるとでも……………ぐはあ！』

まずは一発、強烈なアッパーを腹に喰らわして、後ろに後退した

『小僧がいい気になるなあああ！』

漆黒火竜は火炎ブレスを放った。しかし、放つタイミングが少し遅かったのだ

「獄炎ブレス！」

黒き巨大な火炎ブレスを相手に向かって放った少し後に向こうはブレスを放った。

火炎ブレスは獄炎ブレスに飲み込まれ相手に向かっていった

『グオオオオオ！』

確かに相手に当たった。普通の飛竜だったらひと堪りも無いだろう。そう、普通の（…………）飛竜だったらだ。

『小童が覚悟はいいな？』

……………まだ駄目か。

「なあ」

『何だ』

……………こいつ、絶対にランガと一緒にだ。

「呪縛から解き放ってやろうか？」

『呪縛？我が呪縛されているだと？世迷い言を』

……………ランガと違って呪縛されてるとは気付いてないな

「レオ、レア、コウ、リナ、力を貸してくれ……………！」

【そんなのは決まっている】

【マスターが困ってるときに助けない訳ないじゃない】

【再び、力を貸せて嬉しいぞ】

【マスター、今度は離しませんよ】

リナ……………離しませんよって……………軽く怖いよ

強風が吹き荒れ、クロスの側にリオウス、リオレイア、リオソウル、リオハート、ゴールドナ、シルバーソルが一斉に揃った。

『何故、我々の問いかけに応じなかったあの二体が此処に……………』

『何にしてもこれで救われる』

なんか言ってるが無視しよう

「レオとレアは上からブレスを放ち続けて、リオッドとリアナは俺の後ろから援護ブレス。コウとリナは左右からブレスだ」

各々が頷き、配置に着いた。やるしかない、俺達で呪縛の因縁から解き放つてやる！……………呪縛がどれ程きついか知ってるかな、俺が昔、呪縛によって暴走し、村を焼き尽くした。あの時の苦しさをこいつにも味あわせては駄目なんだ！

あの苦しさを味わうのは俺だけで十分だ……………

「一斉放射開始！」

『はああああああああ』

『行くぜえええええ！』

リオ6種が一斉にブレスを放った。しかし、効いていないのか、平然と黒リオレウスが立っていた。

『その程度か』

ギリリッ！とレオが音を立てた。俺はそれを右腕の前に出して止めた。

「お前ら、一斉に一体化するぞ」

『それじゃ、主の体が崩壊してしまう！』

『何でそんな自殺行為を！』

「とにかくやるぞ。異論は認めん。俺はお前ら信じてるからな」

『『『………』』』』

『クロス！指示を！』』

『ちょっと待て！やったらクロスが崩壊しちまうかも知れないんだぞ！』

『俺達が主を信じなくて誰が信じるんだ？』

『………』

どうやら、覚悟は決まったみたいだな。

「一体化！」

クロスの身体を光が渦巻き、その中にレオ、レア、リオッド、リアナ、コウ、リナが呑み込まれていった。

「一体化『ファイナライズリオマスター』！」

背中に各リオ種の翼、胴体は新緑、右腕は蒼く、左腕は桃色に、脚はその逆、顔はリオレウス通常種そのもの、尻尾は金と銀の二色混合。眼は昔、暴走していた頃のクロスそのものだった『ふっ、その様な見かけ倒しで、我が倒せるのか？』

「……………」

クロスはその場から居なくなった。否、誰にも見えないスピードで移動したのだ

『ガハッ!』

黒リオレウスの胴体を蹴り空中へ打ち上げ

「……………」

両手を組んで背中に打撃。そのまま打ち落とした

「呪縛解放完了……………」

クロスはそのまま地面へと降り立った。

『……………』

クロスは一体化を解き、黒リオレウスに近づいた

「お前はもう闇ではなく、暗黒のリオレウスだよ。もう縛るものはない。一緒に来ないか? 歓迎するぜ」

『……………嵐雅……………』

「何だ、嵐雅と知り合いだったのか。嵐雅は俺の大切な友達だよ。暗黒ティガレックスだけだな(笑)」

『俺の力は強いぞ?』

「どんと来いだ!」

俺は暗黒リオレウスとなったグロードをパートナーにした。これで



全員が揃った。時の旅人が探すは自身の欠片。最後はこの世界にある。それが揃えば……………いや、ヒナタ達を先ずは立派なハスターにしないと！

「絶対に幸せにするからな、ヒナタ！」

十七話 え？もしかして、俺が戻る前に修行終わっちゃった！？

「やべえ！ゆつくりしすぎた！」

あれから1ヶ月、俺は龍の溪谷でリオ種と共に過ごしていた。理由は、リオレウスの長老がしつこく足止めをしてきたからだ。

『どんまいだ、主』

「つてか、レオもそうだが、グロードも俺をそう呼ぶんだな」

『当たり前だ。我の主はお主しか居らぬからな』

「ははは……………」

俺は苦笑しながら、グロードの背中に乗って、ポツケ村を目指す

『主は、我とランガ以外にオリジナルを何体仲間にしておるのだ？』

「闇迅龍のヴァイス」

『そうか。あの暴れ者のヴァイスを』

そんなに有名なのかよ、ヴァイス。

「欠片は全て集まった。最終戦争はまだしない方が良いな」

ラストバトル

『ほお、欠片とは？』

「あの場所で暴走しちゃった時にさ、俺の本来の力と姿が欠片になつて飛び散っちゃって」

『それで欠片を集めていたのか』

「……………レオはお前の息子だろ？　言わなくて良かったのか？」

『大丈夫だ、既に言つてある』

「早！」

言つたの早！　まったく気が付かなかった……………

『主よ、私も一緒に居ても良いのか？』

「良くなかったら、お前の背中に乗ってないよ」

『そうか、感謝するぞ主』

そう言つてグロードはスピードを上げた

「見えてきた、ポツケ村だ」

『流石に寒いな』

「ぶつちやけ俺は、灼熱、仙水、雷電、樹木、大地、冷氷の力を使うから、あらゆる攻撃や環境に対応できるぞ」

『もはや主が化け物に見えてきたぞ』

当たり前だ！それに加えて背中翼があるんだからな！

「取り敢えず、村の外れでグロードは擬人化して俺と一緒に村に入るぞ」

村の中を歩いていくが、誰も俺の事がわからないらしい。当たり前ながら、俺は向こうの服装をしているためか、誰もクロスだと気付かないのだろう。

「おや、新入りかい？見ない顔だねえ。英雄殿の隣の顔は」

「良く解ったね。誰も俺だって気付かなかったのに」

「いつも臍屢してもらってたからね。すぐにでも解るさ」

「……………」

グロードは黙ったまま、何かを考えているようだった。

「そろそろ、村長に挨拶してくるよ」

「今、なんかこつちじゃ出てこないモンスターが出てきたって慌てるからあまり近づかない方が得策だよ」

「!？」

「名前はなんて言っただかな。べ、べ……………」

「ベリオロスだな。ユクモの方の凍土に生息してるはずのモンスターがなぜ此方に……………」

「恐らくはここ最近で自然環境が少しおかしくなったのが原因だと思うのだが」

「どういう事だ？」

「凍土が暖かくなってきたと風の噂で聞いてな」

「なるほどな……………」

「主はどうするつもりだ？」

……………メンバー勢揃いしてそうだな

「行ってみるしかないだろ。恐らくは……………いや、何でもない」

取り敢えずは雪山に行くしかないな

〈数分後〉

現在地：雪山

「まいった……………本当に勢揃いしているとは……………」

ほんと選り取り見取だな。

「どうかしたのか主よ」

「いや、何でもない」

何でもなくてええよ！何で言わねえんだよ俺！

『クイ〜』

しかも上にいるし！

「普通ガークアは翔ばない筈だぞ！？」

『クア〜』

「クア。このままBC<sup>ベースキャンフ</sup>で待機！良いな」

『クア〜！』

取り敢えず登るか

その頃、雪山山頂では

『見つけた……………私の旦那様』

クロスをしつかりと視界に捉え、そう呟く白き白銀の体軀をしたモンスターがいた。

「……………」

「白いモンスターが沢山居るな」

「全員パートナーだよ。居て欲しくなかった」

目の前のフルフル、キリン二頭はまだいい。だが、アグナコトル亜種、何故かベリオロス二頭……………そしてギギネブラときた。

「フルル、リン、リア、ナコ、リオロにリム、ギイちゃんまで」

ほんと白いな

『大丈夫？あのベリオロスに会ってない？』

「まだ会ってないが」

『マスター……………の……………貞操……………の……………危機……………』

「フルル、大袈裟」

『大袈裟じゃありません！』

「り、リア？」

『お姉ちゃんの言う通りだよ！』

「リン……………」

『あの変態ベリオロスには絶対マスターを渡さない!』

あの、リオロもベリオロスだね? そういや最初のリムの発言もおかしかったような……………」

「どうやら、主が大変だということは理解した」

「ああ、今回の相手の狙いが俺だからな」

しかし、狙われ過ぎだな。俺。

「さーて今回はどんな感じに狙われてるんだろなっ」と

「狙われている者の台詞とは思えないのだが」

「当たり前じゃん、どうせ……………チツ」

俺が舌打ちした理由……………それは、来た(・)か(・)ら(・)だ(・)。

「お出ましてわけですかい。これまた別嬪さんですねえ」

リオロとリムと同じ白銀の体躯、そして二頭とは明らかに色の違う  
藍色の瞳

「……………どうも左手が疼くな」

今は言えないが体に秘密が沢山あるからか、左手が疼く



「俺になんの用ですかい？」

『私の……………』

「お断りします」

聞こえてないと思ったのか？山頂の声ならきつちりと聞こえてたわ！怖ええよ！あんなこと眩かれたら

『そう……………なら、……………力づく……………』

「やれるものならな！」

言っておくが、あいつ等は俺のなかに入ってもらった。そっちの方が安全だからな

「手始めに《落雷》」

俺は自分の周辺に落雷を落として近付けなくした

『卑怯』

「何とでも言え、こつしなきや俺はお前にお持ち帰りされかねん」

さて、さっさとどうにかしないと

同時刻：ポツケ村

「あれ？」

いつも以上に騒がしいポケ村

「いったい何があったんでしょか」

「わからないから情報収集しようよ」

「村長さんどうしたんですか？」

「丁度良いときに帰ってきたのお」

「へ？」

「雪山にこつちには居ない筈のモンスターが目撃されてのお。種族はベリオロスって種族らしくてのお。先刻、二人のハンターが向かったのじゃが」

どうしたんだろう、嫌に齒切れの悪い言い方をしてる

「一人はやけに黒いレウスシリーズ」

「!？」

レウス!？しかも黒いって……………

「もう一人はの、夜叉・真シリーズのハンターなのじゃよ」

「夜叉・真……………あの古龍ヤマツカミ浮岳龍の」

「うむ。しかも向かってからなんじゃが、どうも落雷が多数目撃さ

れておるのじゃよ」

「うそ……………」

私は夜叉・真の防具は見覚えがあった。だって、また再び会おうって言うてくれたあの人の防具……………」

「ヒナタちゃん！」

そのタイミングでララが戻ってきた

「どうしたの？」

「……………」今すぐ雪山に行きたい。でも、頭にあの人の声が響いてきて、『来るな』って」

「ヒナタさん？」

私はルイが来たので、村長が教えてくれた事を二人に伝えた

「でも」

「ヒナタさんの頭に響いているんですよね、クロスさんの声が」

「うん。しかも、来るなって……………」絶対に私たちを巻き込みたくないからとしか」

「でもヒナタちゃんは行きたいんでしょう？」

ズドオオオン！

雪山の方から凄い音が響いた。

「やっべえ！力任せに撃っちまったから自分だけ吹き飛ぶとか……」

え？この声……………

クロス side

「やっべえ！力任せに撃っちまったから自分だけ吹き飛ぶとか……」

力のバランス間違えた！

「じゃあねえ、グロードに頼んでもう一度行くしか……………」

俺はそこで言葉を止めた。背中に弱い衝撃を感じたからだ。誰が抱き付いてきたとかわかつてる。

「随分と……………待たせちゃったなヒナタ」

「待たせ……………過ぎですよ」

目には涙を浮かべ俺は向き直り目の前の少女にそう言った

「すまねえが、話は後だ」

俺は上に跳ぶと共に上空に待機していた、グロードの背中にヒナタと共に着地した。……………ヒナタ！？

「え？ちよつ、なんで!？」

「私も行く!」

我が儘言い始めたよ。

「相手の狙いは俺なんだぞ!？」

近くにいたら巻き込みまう

「それでも良い!」

無茶苦茶だなあ

『主、もうすぐ着くぞ。必要ならば我が押さえておくが』

「グロード……………任せたぜ」

「待たせたな、ストーカー」

『私の……………「断る!」……………なら死んで?』

極端だなあ。

「《ガンロックキャノン!》」

『アイスガンロック』

んなあ!？

共に当たって砕けたかと思いきや、小さくはなつたがまだまだでかい氷塊がこちらに飛んできた

「吹き飛ばせ！《マグマキャノン》」

ガンランスの先からマグマの塊を撃ちだし、氷塊を溶かした。このガンランスは自家製なので製造方法は内緒だ

「あつぶねえな」

『死んで』

仕方ねえ、あれするか

「《獄炎プレス！》」

黒い炎球がベリオロスに向かって飛んでいった

『アイスガンロック』

二つが酷くぶつかり合い辺りに蒸発した氷から出来た霧が漂う

「終わりだぜ《契約印掌》」

『スモールアイスガンロック』

先に届いたのは俺の拳だった。その直後、何かが腹部を貫通した

「……………」

『え……………』

後ろで聞こえるヒナタの悲鳴と慌てるベリオロスの表情を最後に俺は意識を失った。

ヒナタ side

「いやあああああああ！」

『グルルルルル』

この黒いリオレウスが何か言っているけど私には分からない

『このままでは不味い。ひとまず村まで運ばねば』

え？何で言葉がいきなり……………

『小娘、我では主を背に乗せられぬ、乗せてはくれぬだろうか、このままでは主が死んでしまうからな』

「わ、わかりました」

今、クロスさんの事を主って呼んでたのってやっぱり……………

「何でこんなに軽いの？」

あれ？お腹の穴が無くなって。しかもかなり軽い。何で？

「早く皆のところへ行かなきゃ！」

それから、グロードさん（乗せたときに名前を聞いた）の背中に  
乗り、村に急いで戻った

現在地：村の診療所

「全治4日ですね」

へ？

「4日ですか？」

「信じられませんが、本当に腹部を貫通されたのですか？」

「はい」

「ほぼ無傷なのは信じられないのですが」

そう言われたって



「自己再生力が異常なだけだ」

もう……………目を覚ましたの!?

クロスside

「自己再生力が異常なだけだ」

「普通貫通していたら意識は戻るおろか、死へ至りますが」

「そこら辺も普通じゃないね」

「そうですか。まあ、貴方の場合はそれが普通でしたしね」

「まあな」

「とにかく! 4日は絶対安静ですから、安静にしていることですな」

「やだ」

「え……………」

「嫌だよ!」

よし、瞬間移動して逃げるか

『逃がさない……………』

不意打ちの大口は無いと思うな、フルル。

バクンツ。そのままフルフルによって家に連行されたのは言つまでもない。

……つまり、俺は用無しってわけか

「ごめんなさい」

「ヒナタ達は悪くない。悪いのは戻ってくるのが遅くなった俺なんだから」

しかしあともう少しでヒナタ達もG級か。油断してると越されるかもな……

「……言いたかないんだが、顔が近すぎだフルル」

『油断……すると……すぐ……逃げる……』

厳しいな

「何はともあれだ。少しは休んだらどうだ？」

「ガード……ヒナタ達をここまで見てくれてありがとな。

ガード達が良ければだけど、このまま家にいないか？俺は歓迎するが」

「良いのか？今でもかなりの人数だが」

「敷地面積半端無い、部屋の数が多すぎ。だから使わないより、誰かが使ってくれると有り難いんだ」

「なら、遠慮無く」

「ありがとな」

「あとで例のあれ（・・・）持ってくるから」

「マジで!？」

「丁度出来てるんじゃないか？」

「少し話しようか、ヒナタ」

「え？」

「それじゃあ、俺達は退室させてもらっぜ」

「すまない」

そう言つてガードはララとルイを連れて部屋から出ていった。

「ごめんな。もう時間が無いんだ」

「え？」

「この場所で、俺の旅は終わりを迎える」

「どういう……………ことですか？」

「この体の失つた本当の力がラティオ<sup>パート</sup>の地に眠っている」

「ラティオ？」

「火山。ラティオ活火山だ。俺はそこで最後のパーツを取り戻し、そして再び果て無き旅をすることになる。今度は終わりなき旅を」

「戻って……………来れますよね？」

「って言うか、この地から離れたくないので、たぶん戻ってきてもヒナタと子供が出来るまで居るんじゃないかな」

「こつ……………／／／／／」

「だから、安心しなつて」

「あうあう」

俺はヒナタを抱き寄せ

「今まで心配かけたな。改めて言わせてもらつ。この宿命が終わつたら結婚しよう」

「ぐすつ……………はい！」

「一緒にラティオ遺跡に行ってくれないか」

「ラティオ遺跡？」

「火山が噴火し埋まってしまった文明が有った場所だ。そこに最後のパーツがある」

「……………」

「絶対にヒナタを守って見せる」

そつすれば……………俺は師匠に今を過去を未来を報告  
出来るしな

「クロスさん」

「なんだ」

「私、クロスさんに守られてばかりじゃいけないって思ってたけど  
結局守られてるね」

「ならば、護り抜くが我が宿命<sup>さだめ</sup>」

「ふふっ」

「誰であろうと、ヒナタに……………我が妻に傷をつけるものは  
赦さぬ」

「クロスさん、落ち着いて」

「ああ、皆に黙って行く？」

「そつする」

「ヒナタが俺の案に乗るなんて珍しい」

「私は貴方の妻ですから」

「言われちまったな。それじゃあ！今すぐいきますか！」

俺は時空の扉を開いてヒナタと共に最後の戦いへ向かった。

十八話 最終決戦。クロス奇跡のオーバードライブ！『ティオリクセル』

現在地：ラティオ活火山BC（ベースキャンプ）

「目的地はエリア7、それまでに何度か戦闘になるかもしれないけど、俺が守ってやるから」

「でも……………」

「今のヒナタは武器も防具も着けてないの忘れてない？」

「あ……………」

「絶対に護る。命に代えても」

「え？」

「何でもないよ」

そうだ、ヒナタを心配させるまでもない。俺は何がなんでもヒナタを護りとおすだけなんだから

「変なクロスさん」

「とりあえず、さっさと行きますか」

これが俺の旅の終わり

【死ぬ気か？】

誰が死ぬかよ

【だな】

今回はお前を使うことになりそうだ

【俺はいつでも大歓迎だな】

アルガ……………遠慮無く借りるからな、**覇龍**であるお前の力を

【私の力は？】

心配しなくともリーガの力も借りるから

【ねえ】

何だ？

【死なないでね】

誰が死ぬか！

【そうだな、お前はもう死んでるからな】

死んでねえよ！人を勝手にお化け扱いすんじゃないやねえ！

【また……………あとでな】

ああ。また……………な



「ここだな」

目の前はマグマが噴き上がっているマグマの湖

「この下に遺跡の入口がある」

「でも、どう見たってマグマにしか」

「当たり前。だからマグマを割って入るんだよ」

「マグマを……………割る？」

「こつやつてな！」

俺が右腕をマグマに振り翳す。すると、マグマが左右に割れ、中から入口が見えた

「自然界に存在するものならある程度は操れるからな。こんなのは造作もない」

「凄い……………人の妻になっちゃいましたね」

「凄くないよ。俺の手を離すなよ」

俺は離さぬようにしっかりとヒナタの手を握り、下へ飛び降りた。

「なかなか暑いな」

「クーラードリンク飲んだのに」

俺の横でへばっていた。あれ？俺飲んだっけ？……………あ！クー  
ラードリンク飲んでなかった！

「ヒナタ、これ飲め」

俺はヒナタにクーラードリンクを手渡す

「飲んでなかったんですか！？」

「飲んでなかった」

オウム返しの様にヒナタに言う

「平気……………なんですか？」

「平気。汗もかいてないし」

「やっぱり、クロスさんは凄いですね」

別にすぐは無いんだがな

「とにかく、先に進むぞ。クーラードリンク飲み忘れるなよ？」

「分かってます。私は貴方の妻ですから」

「そんなに俺の妻になれたのが嬉しい？」

「はい！」

「そっか」

.....絶対に幸せにしてやるからな

「でも」

でも？

「一夫多妻でも別に良いですよ？」

！？

「な、なぜ？」

「面白そうですから」

そんな理由かああああ！

「《真空葬裂斬》！」

いつのまにか周りに集まっていたイーオスを瞬殺してから、ついでに遺跡の扉も破壊する

「此所から強い共鳴を感じる」

「それが.....最後なんですよね？」

「ああ。そして、俺の旅の終着点」

そして、新たな旅立ちの場所

「行くぞ。最初で最後の戦いに」

「？」

中は薄暗く、ヒナタには見えていないようだ。見えない方が良かった。出なければこんな奴に気付かれずに済んだ筈なのに……

……

『グガアアアアアアアアア！』

「ちいつ！」

間一髪ヒナタを抱えて横に避けた。あいつの放ったプレスはそこにあったドラグライトを蒸発させていた。

「どんだけ火力あんだよ。ドラグライトを蒸発させる威力とか」

「あれに………勝てるんですか？」

「勝てる勝てないじゃない。勝つんだ！」

俺はヒナタを物陰に避難させた後

「絶対に此所から動くな」

「でも！」

「あれは異常だ。俺の全力でも勝てるかどうか分からない。でも、

勝たなきゃならないんだ。絶対にな！」

俺は相手の体に一太刀入れたが

「くそ！堅え」

すぐに弾き返され、隙が出来たところに尻尾をぶつけられて飛ばされてしまった

「ぐはあっ！」

このままじゃ決着が着かねえぞ！

「ティガスラッシュ  
《轟竜斬》！」

右腕を轟竜に変化させて放った斬撃破もその体の硬さで容易く防がれてしまった

「これも駄目！？」

ていうか、くそ硬えな！

「グラビインパクト  
《鎧竜熱流砲》！」

鎧竜の熱線の4倍のものを化け物に打ち込んだ

「どつだ！」

しかし、煙の中から出てきたのはほぼ無傷の化け物だった

「化け物め」

『それはお主もだろうに』

「喋れるんだな」

『しかし一時的なものよ。我は何者かに操られておる。我を殺し、解放してくれはしないだろうか』

「殺しはしない。ただな、その呪縛は解放してやるよ」

『たの……ん……だ……ぞ………グガアアアアアア！』

意識を持っていかれたか

「我が名はクロス・ライト。汝を呪縛から解放する！」

「《獄炎プレス》！」

その黒き火の玉は地獄の業火を圧縮し、放ったもの。その威力はリオレウスのプレスの120倍にもなる

「《ラウンドスピア迅龍瞬刀槍》！」

ミラルーツをも貫く程の鋭い棘を飛ばす尻尾で無限に棘をとばす。

「これでどうだ？」

『…………グ…………グオ……………』

どうやら、先程より効いているが、たいしたダメージにはなっていない筈だ。内側から抑えてくれているのか、動きが鈍くて助かる

「ふむ。呪縛から解くには更なる力をぶつけなければならぬようだな。しかし、今の我にその様な力は残ってはおらぬし……………」

……………」

油断していた。

奴がヒナタを狙っていたのを

「きゃあああああ！」

「ヒナタ!？」

目の前でヒナタが化け物（仮）に蹴り飛ばされていた……………」

「ヒナタ!」

俺は壁にぶつかる前にヒナタをキャッチした

「大丈夫です。何かに阻害されたようにダメージが無いんです」

阻害?……………なるほどね。今回のこれはそういう  
ことか

「集え」

俺はそう言って右腕を前に突き出した。すると光る何かが手の中に収まった

「今すぐ、解き放ってやるからな」

「解き放つ？」

「ああ。あいつは、誰かに操られてるんだよ。でも、それも分かった。居るんだろ？良くできた俺のコピー！」

ようやくパーツが戻ってあいつの名前も思い出した。オルガの後ろの闇からどす黒い俺と瓜二つの奴が姿を現した

「これまたそっくりで」

「……………シネ」

「クロスさん」

「大丈夫だ。それに今は……………」

そこから先を言わずにヒナタを壁に寄り掛かせて、俺は走った。クロスとしてはなく……………パーツをすべて取り戻した本来の姿……………

……………クーネリオンとして……………

「終わりだ」



「……………ソッチガナ」

「呪縛解放！」

俺はオルガの額に右手に溜めた光を当てた。一瞬よろめいたが、すぐに体勢を立て直した

『むう……………助かったぞ』

「お願いがあるんだが、その壁に寄りかかっている、俺の妻を守って貰えないだろうか」

『承知した』

オルガはヒナタの方へ向かった。向こうは向こうで何とかしてくれるだろ

「オマエ……………ヒカリ……………キボウ……………ノゾミ……………キセキ……………モツ……………オレ、ヨワル……………ヤミ……………ヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミ」

「……………信じてみますか。奇跡とやらを」

皆を守る。守りたい！皆を守るための新たな力を！

「うおおおおおお！《オーバードライブ》！」

俺の体が一旦ティガフォームになりそこからまた変わり始めた。

「『ティオリクセル』！」

まるでティガレックスの外見を鎧にした感じの何者かがそこに居た

「さあ。今すぐ切り刻んでやるよ！」

「シネ！」

ぶつかる光と闇。そのぶつかり合いは激しさを増し、それはまるで

.....

「殺し合いを見てるみたいで怖い」

『仕方がなからう。みたいではなく、本物の殺し合いなのだからな。お互いに強烈な殺気を出しているからな。下手をすれば相討ちになるかもしれぬな』

「止められ.....ないですよね」

『うむ。止めれば、我らが殺されかねん。今は見守ることしか出来ぬ』

「私、情けないな」

『そなたは情けなくはないぞ。普通の者なら、こんな所まで付いては来ぬぞ。それでも付いてきた。それはそなたの勇気だ。誇れるものだぞ』

「そうですか？」

『うむ。それに我は、我の本体であるあやつがそなたを選んだか分

かるからな』

「え……………今、なんて……………」

『我はあやつの失った力の集合体なのだよ。我を呪縛から解放してくれた時にはあやつは全てを思い出していた。全てを取り戻していた。今の我はもはやあやつに触れることすら出来ぬだろうな』

「それじゃ……………！」

『今は見守ることだ。この戦いが終わったとき、全てが終わり、また始まりを示すだろう』

「死なないで」

ヒナタの声は届かず、クロスは死ぬことになる。相討ちという最悪の形で。

「これで止めだあ！」

「シヌガイイ！」

お互いの放った一撃は、闇は上半身をが吹き飛び、クロスは左胸……………心臓を貫かれた

「がはっ！」

クロスはその場に倒れてしまった。そして、動くことはなかった。そう、本来ならば

「クロスさん！」

『クロス！』

ヒナタが駆け寄ろうとした瞬間、次元の扉が開きクロスを飲み込み、閉じた

「……………そ……………」

ヒナタはその場に座り込んだ。そして、約10秒経った時だった。  
「な〜に座り込んでんだよ。ヒナタ」

突如、ヒナタの後ろから聞き覚えのある声が聴こえてきたのだ

「…………どこ……………いつてたんですか？……………ぐすつ……………」

「すまん、瀕死になった状態で飛ばされてな、それから体を治してから、ここに帰ってきたんだ」

「どうやったら死にかけの人間が体を治せるんですか！？それと前に思いましたけど、クロスさんはどうしてあんなに軽いんですか！？」

「それは……………禁則事項です」

「誤魔化さないで下さい！」

「オルガ……………どうにかならない？」

『今回ばかりは我には何も出来んな』

「お前は俺の力のバックアップだろ!？」

『今、それは関係無いことだ』

「裏切り者!」

「逃げないで下さい!」

「いや、ヒナタ。一旦落ち着こう」

「これが落ち着いていられますか!」

「ヒナタは一度見てる筈だ。俺の体が貫かれたときの修復を。俺の体はな、緊急時に急速肉体再生が出来るようになってるの!質問1は答えたぞ」

「もう1つも答えてください」

「そっちの方なんだが、実は俺自身も不明なんだ」

「へ?」

「俺でも解らないんだよ」

「解らないんですか?」

「ああ」

「ふふっ」

「オルガ」

『うむ。1つに戻るとしよう』

俺とオルガの体が光り、オルガが小さな光球になり、俺のなかに吸い込まれた

「さてと、ヒナタ！」

「はい」

「ポッケに、皆の所に戻りますか！」

「はい！」

俺は次元の扉を開いた

「あれ？向こう側が見えますよ？」

「見えなかったのは、その時まで俺が時の旅人だったから。今は次元の旅人だから、繋げてる空間が不安定な状態から安定した状態になったからだよ」

「なんか難しすぎてよくわかりません」

「後々ゆっくり教えるさ。時間はたっぷりあるんだからさ」

「はい！」

俺たちは扉ゲートを通り、ポケット村に戻った。しかし、待っていたのは皆からの説教だった。

「どうして、ヒナタを連れていったんだ？」

「それは」

「ヒナタは（私は）」

「俺の」クロスさんの「」

「妻だから！」

そして、束の間の静寂

「はあ！？」

「い、いつ結婚したの!? ヒナちゃん!」

「ララ、秘密だよ」

「何時の間に婚姻届けなんか出した！」

「俺がヒナタ達をドンドルマで引き取った際に」

「決定的だったのは？」

「俺がヒナタと二人きりになったときに改めて結婚しようって」

「油断も隙もないな」

「そりゃどうも」

「誉めてない」

ははは！本当に楽しいな！やっぱり戻ってきて良かったよ！



## 最終話：死者への手向け。そして、明日に向かって

あれから、2週間が経った。俺は相変わらずポツケ村を拠点として活動が続けていた。

「ヒナタ、お前は狩りをしない方が……………」

「大丈夫。私は大丈夫だから」

ヒナタの中には子どもがいる。俺とのだ。だから、あまり狩りは控えて欲しいのだが……………

「私は大丈夫だから」

「ララ！」

「ヒナタちゃんは大人しく家で待つてようね」

「ルイ！速攻で行って速攻で終わらずぞ！」

「はい！」

実は、あの後ララとルイが結婚していたのが発覚し、さらにヒナタが子どもを宿した同時期に子どもを宿していた事も発覚し、ララにはヒナタを押さえるストッパーになってもらっていた。

ルイと俺はお互い妻が心配だから素早く依頼を終わらせ傍に居るようにしていた。その為か、ルイは瞬速の翼、俺は神速の翼なんて異名で呼ばれていた。二人揃えば瞬神なんて呼ばれたりもした

「今日も瞬殺してやる」

「クロスさん。たまにはドンドルマで狩りなんかどうですか？」

「ドンドルマはダメだ。今はハンター育成学校が周りを試験の会場にしてるからな。邪魔に行く事になる」

「なら、邪魔しませんか？僕達をクロスさんに押し付けた教官の」

「……………賛成」

それで俺達はドンドルマに行くことにしたのだが

「私も行きます」

「私も行く!」

ちっ！ヒナタとララが一緒だったら狩りがスムーズにいかなくなる可能性が

「「私達は邪魔をしませんから」」

「「ハモってる時点で結構怪しい」」

あ、そういうことか！

「理由がわかったんですね」

「そういう事なら安心だよ。お金なら結構稼いでたから二人でゆっ

くり周りな」

「成る程そういう事だったんですね」

ルイも分かったようだ

「ちょいと待つてな。面白いもんあるから」

そう言つて俺は空に向かつて指笛を吹いた

「クアー！出番だドンドルマまで半日で行けるな？」

『クイ！』

俺の声に反応し一匹の鳥が走つてきた

「あれつてなんですか？」

「こつちには生息してないからな。あれは丸鳥、ガーグア。俺の相棒だよ、移動の時は重宝してるんだよ。揺れもなく物凄いスピードで荷車ごと飛ぶから……………」

「……飛ぶんですか！？」

「うん。飛ぶよ。普通のガーグアじゃないから」

『クイ！』

どうやら今日も絶好調らしい

「それじゃあ、皆で乗り込め」

「お兄ちゃん？何処かに行くの？」

きららか。他の二人とは一緒じゃないんだな

「ああ。ちよつとな出稼ぎに。その間家の事をまかせていいか？」

「まかせて！」

最近、ヒナタときららがやけに仲が良いのが気になる。何か企んでなければいいが

「それじゃあ、飛ばすぜ！」

『クイ』

そのまま全速力で飛びやがった。結構な高度まで飛びやがった

現在地：ドンドルマ

「半日おろか30分で着くとは」

「かなりのスピードでしたね」

「でも、全然揺れを感じなかったよ」

「そうだね」

「それじゃあ、俺とルイは教官の邪魔をしにいくから、宿の方はまかせて良いか？」

「大丈夫だよ」

「こっちは大丈夫ですから安心して邪魔してきて下さいね」

なんか2週間でヒナタの口調が大人びたな

「クロスさん、早く行きましょう」

「ああ。無茶苦茶嫌な予感がするしな」

そして、俺たちがボードを見ると、試験を行っている密林にクシャルダオラが近づいていると警告が貼り出されていた

「ちつくしよお！」

「クロスさん！？」

「はい、こちら依頼受注窓口……………」

「今すぐ、試験会場になつて密林に行きたい」

「ハンターさん、申し訳御座いませんが、今は行くことが………」

「《覇剛を持つもの》《破壊神》《ポツケの英雄》《神速の翼》俺が持つてゐる異名なんだが………」

「ゴツドハンターの方なのですか！？失礼いたしました！今すぐ受注させていただきます！」

「ルイ！密林に急ぐぞ！手遅れになる前に！」

「はい！」

こうして、俺達はドンドルマからそれほど離れていない密林に急いだ

現在地：密林

「もしかして、ルイなのか？」

「皆、話は後です。密林にクシャルダオラが近付いています。ですから、なるべくベースキャンプから出ないようにしてください」

辺りがざわめく、そりゃパニックになるな

「静まれ！今はパニックな時じゃない！クシャルダオラは俺とルイでどうにかする」

「あの、一体貴方はルイとはどんな関係なんですか？」

「おまえらとこの教官にルイ、ララ、ヒナタを押し付けられた苦  
労人だよ」

「それじゃあ貴方は……………」

「それにな、俺達二人は世話のかかる妻を持つ夫でもあるんだよ」

「え！？二人は結婚してるんですか！？」

「俺はヒナタと」

「僕はララとです」

「ってこんなことやってる場合じゃない！」

「教官の所へ急ぎましょう」

俺はルイを置いていくような猛スピードで密林を駆け抜けた

「《オーバードライブ・ギア》 『ティオリクセル・ギア・チェイン』」

「

俺はこの2週間でいろいろ力が目覚めたり、思い出したり、進化したりしていた。オーバードライブでの進化もそのひとつだった

「邪魔だ！《チェイン・ドライブ》」

逃げ回るランポス達を切り刻み、前に進む

「《チェイン・ストライク》」

クシャルダオラが見えた俺は先制攻撃を仕掛けた

『ぐぎやああああああ！』

「うるせえな！《ティガドライブスラッシュ》！」

俺はそれだけでクシャルダオラが攻撃する間も無く消し去ってしまった

「おい！あれは斬撃であって消し去るようなそんな技じゃねええええ！」

晴れ渡る空、虚しく響くクロスの声。密林は今日も平和だった

「あの、クシャルダオラは？」

「斬撃放った筈なのに、消し去っちゃった」

「仕方ありませんよクロスさんなんですから」

なんか、俺だからって理由で納得されちゃってる（泣）

その後、大量のランポスの相手をしていた教官をみつけ

「教官頑張れ〜」



「頑張ってください！」

「む、お前らは……………応援せんで手伝わんか！」

「今日はとことん邪魔するって決めてるんで却下しまーす！」

「貴様らあああああ！」

教官の怒りは頂点に達し、辺りのランポスを無視してこちらに向かってきた

「うわゝ、教官が怒った！」

「大変だ！」

それでも教官より重い武器を持つてこっちの方が速かったわけで

「教官撒いちゃいましたね」

「どうする？」

「どうしましょうか」

「あの！」

後ろを向くと以前チーム分けの時、仲良しで集まっていた、少しおどどしていた少女がそこにいた

「どうしたのですか？」

「えっと、ヒナタちゃん達と一緒にじゃないって事は二人は体調が悪いんですか？」

「いや？ 頗る快調だよ。今だって街で何か買ってる筈だし」

「あまり、狩りをさせたくないんですよ」

「どうして？」

「適度な運動は別に良い。でも狩りとなると動きが激しくなる。だから、妊婦の二人には狩りはしてほしくないんだ」

「い、今何て……………」

「ヒナタはクロスさんとの子をララは僕との子を宿しているんですよ」

「連れてきてない理由って」

「それだけ。本来は教官に報告するために来たんだが、ちよいと教官を怒らせちゃってな」

「クロスさん、あれは激怒です」

「ガタガタガタガタ」

少女が震えていた

「いい加減振り降ろしたければ振り降ろせばいい。ただし、教官。あなたの武器が一方的に粉碎するだけです」

「我輩に気付いてて話を続けていたのか」

「最初からですよ。言ったでしょ？本来は教官に報告するために来たって」

「二人は何週間なのだ？」

「ヒナタ、ララ。共に2週間目です」

「そうか。二人は今は何処に」

「街で買い物でもしてますよ。変なのに絡まれても大丈夫ですよ？ヒナタは容赦無くぶちかましますから」

「そ、そうか」

教官が苦笑を浮かべていた。気持ちは分からなくもない。俺も最初はそうだったからだ

「クシャルダオラが来ていたと情報がありましたので、こちらで駆除させてもらいました」

「そ、そうか」

「教官。ヒナタ、ルイ、ララは今何級ハンターだと思う？」

「え？みんな下級じゃないの？」

「違うよ。俺は教えられなかったけど、こいつらは師匠が良かった

「からな。凄いよ、この成長ぶりは」

「と言うことは上位なのか？」

「G級ですよ。三人とも」

「！？」

「つと！？」

俺は後ろに下がった。俺の居た場所に拡散弾が被弾していた

「あぶねー！」

これ撃つたのって、やっぱりヒナタだよな。俺の事撃つとかどんだけだよ！

「ほつと！」

キンツ！カンツ！弾を大剣で防ぐ音が響く

「おいおい、マジかよ」

俺が見た方向に満面の笑みを浮かべたヒナタがライトボウガンの銃口を此方に向け、ララが弓を構えていた

「ルイ！ララからの矢雨が来るぞ！」

「ええ！？ララもですか！？」

そう言っていたら降ってきた。もちろん無数の矢だ

「《真空葬裂斬!》」

「《槍烈檄葬突き!》」

俺達は今放てる最大の技を放った。俺は大剣から無数の衝撃波を放つ真空葬裂斬を。

ルイはランスから衝撃を持つ強烈な突き、槍烈檄葬突きを共に放った

「ふう。なんとかなったか？」

「なりましたね」

「さっきの偽物についてだがどう思う」

「許せんね」

「それじゃあ、抹殺する?」

「「するしかないだろ」」

俺達は後ろを向いた。そこにはどす黒い防具と武器を持ったヒナタとララが立っていた

「……………キサマラ……………」クロス」

この言葉を言ったのは俺だ

「あら？貴方はまさか、火山で死ななかったのかしら？」

「……………オレハ……………クロス…トトモニアル」

「出来損ないの癖に」

「貴様等が出来損ないだよ」

ピクツ。ルイの言葉に反応した二人を横目にルイを見た

「ルイ？一体なにがどうしたんだ？」

「大切な仲間をバカにされているようで気に食わないんですよ」

「それは、俺も一緒だ」

俺の体からどす黒い何かが滲み出していた

「貴様等は絶対に赦さねえ」

「イカリガ、ゼツボウガ、オレノチカラニナル」

「俺は、お前らを殺す！」

「オレハ、オマエヲコロス！」

俺の怒りは頂点を越えていた。あのとき、俺は確かに上半身を吹き飛ばした。しかし、俺はなにを思ったのか、残っていたこいつの破片を取り込み、蘇らせた。今は元の人格の、戦ったときのままのこ

いつが横に居る、1つ違うのが、こいつは俺の負の感情だけでなく、正の感情でも力に変換出来るようになったくらいだ。そして、今のこいつは、怒りを頂点ぶち抜いた俺の感情がリンクし、果てしなく力を持った状態になっていた

「あなた達に殺せ……………!？」

「《槍烈檄葬突き》」

「《無天月葬神斬》」

……………俺が放つ技は、決まってる！

「《天衝絶牙九纒斬り!》」

ルイと闇の二人の攻撃が避けられ、二人が一カ所に固まった所に放った。本来は放ってはいけない禁忌なのだが、今回は怒りで我を忘れかけていた。

「うそ、なにあの技」

「人が放つような技じゃない」

「死ね」

紅く血で染まった右目で二人を見据え、そして斬った

「死に絶えろ。そして、永遠に苦しみ」

「クロスさん、その右眼は」

「気にするな。あれは禁業だったんだが、仕方がなかったか。しかし、お前は出来損ないじゃない。ある意味、完全体なのかもな」

「ふっ、そうだな」

「アルファ、ありがとう」

「礼はイラン。俺もムカついたから殺っただけだ」

そう言っただけで俺の中に黒い霧のように戻っていった。お疲れ様

「行くぜ。ルイ」

「何処へ」

「決まってるだろ。ドンドルマに戻るんだよ」

「こちらで試験は一時中断しよう。また、古龍にこられては困るからな」

そして、行きは二人だったのに帰りは多人数になっていた

「ふう」

大衆酒場に戻ると周りがざわめきだした

おい、瞬速の翼に神速の翼だぜ

やっぱり密林のクシャルを倒しに行っただけというのは



本当みたいだな

化け物みたいな強さだな

しかも、神速の翼の方は異名を2つ以上もつゴッドハンターらしいぜ

マジかよ

ありえねえぜ

でもよ、もし噂が本当なら、最強のハンターが目の前に居るってことじゃねえか

すげえな、俺達は伝説を目の当たりにしてるってことが

今日の狩りは良いことがあるかもしれねえな

「なんかすごい噂になってるな」

「あー」

行きに脅した受付の子が話し掛けてきた

「恐らく、俺が居ること噂がたったから、ギルドマスターが呼んでるんだろ？」

「は、はい」

「君にボーナス弾むように言っとくよ。脅しちゃった詫びだ」

そう言つて酒場の奥に入つていった

「ほっほっほ。久しいのお」

「まだくたばつてなかったのかよ」

「まだまだ死ねぬよ。お主の様な輩が居るからのお」

「あと、外の受付嬢何だが、あの子に特別ボーナスを弾んでやってくれないか？」

「どうしてじゃ？」

「俺が脅して無理矢理密林に出たんだよ。その詫び」

「それでは、今回お主に発生したクシャルダオラ討伐の謝礼金を嬢ちゃんに全て渡せばいいのじゃな？」

「構わねえよ？金は腐るほどあるから」

「本当にお主は不思議じゃのお」

「前から言つてるよな、その台詞」

「そうじゃ、お主からこれを渡せば良かろう」

そう言つて本来俺の手元に行く筈だった謝礼金が渡された

「何が言いたい」

「それで嬢ちゃんを手に入れろと言ってるのじゃよ」

「もう、妻いますけど」

「お主は重婚が認められとるよ」

「もはや恐怖でしかねえ！」

「そう言いなさんな」

「兎に角渡してきますよ」

俺は部屋から出ると、さっきの受け付けの子に酔っ払いが言い寄っていた

「よお姉ちゃん。俺と遊ばねえか」

「や、やめてください」

「良いじゃねえかよ」

俺は気配も無く後ろから近付くと

「嫌がつてんだろやめろ」

「ああ？」

「死にたいのか？」

俺は手加減無しに殺気を出していた。

「ひiiiiiiii！」

酔っ払いは怯えて逃げてしまった。

「大丈夫だったか？」

「は、はい」

「ほらよ」

俺は金を渡した

「これは？」

「本来は俺のクシャルダオラ討伐の謝礼金だったもの。今は君への特別ボーナスだけどな」

「そ、そんな！わるいですよ！」

「良いから受け取ってくれないか？俺は金が余るほどあるから、良いんだ」

「で、でも」

「さっき言っただろ？詫びだって」

「で、でも！」

「つべこべ言ってるじゃねえよ」

「え？」

「……………じゃあな」

俺はそのまま啞然とした彼女をその場に残し、大衆酒場をあとにした

はあ。なんか後味悪いな

「さてと、宿に戻ってヒナタ達と世間話でも……………」

後ろから軽い衝突。ヒナタではない事は確かだ

「普通、追いかけないぜ？」

「……………」

「悪いけど妻を待たせちゃ悪いから早く行きたいのだけれど」

「ギルドマスターから聞きました」

あの爺い余計なこと言いやがったな！

「貴方は重婚が認められてるって」

「悪夢だ……………」

「貴方を好きになっちゃいけませんか？」

「人を好きになるのはその人の自由。君が好きになったのはよりもよって化け物だよ？それでも良いの？」

「……………」

気配が少し遠ざかる。そうだ。こんな化け物を好きになるより普通の暮らしをしてた方が幸せに……………」

「なぜ刺すヒナタ」

「あら？私は認めましたよね？重婚」

そうか。遠ざかったのはこのせいか！

「だからって、普通片手剣で人刺すか？」

「あなたなら刺せますよ。普通に」

「まあな、傷がすぐに治るから」

「あ、あの。刺さってますよね」

「気にするな。幻覚だ」

「どうやったら幻覚って言えるんですか！？」

「さあ」

「私、先に宿に戻ってますね」

そして、ヒナタは戻る際に小声で『あの子を手に入れないと宿には入れませんよ』と怖い事を言われた

「……………」

「だ、大丈夫ですか？汗が凄いですけど」

「とにかく、俺が好きなんだよね？」

「は、はい」

「なら、婚姻届出しに行こう」

「展開早くないですか！？あと、片手剣抜きませんか？」

「忘れてた」

俺は刺さってた片手剣を抜き、溶かし、蒸発させてから、歩き出した

「俺と結婚したら、ポケ村に来ることになるけどそれでもいい？」

「はい」

甘える猫の様に寄り添ってくる。正直手放したくはない。が、ヒナタが怖い。なんか、きららともなんか話してたから、暫くは遺跡にでも閉じ籠るのが良いかもしれない

「そっいや、名前は？」

「ミーシャです」

「俺はクロスだ。これから末永くよろしくな」

「はい！」

こうして、ヒナタの策略により妻一人追加。聞いた所ミーシャは14歳だった。それなのに受理された。どうやら俺がゴッドハンターと言う理由から、相手が12歳でも受理されるみたいだ。

傍迷惑な話だ

「これからどうするか」

「宿には戻らないんですか？」

「戻ったら蜂の巣にされるのがオチだ」

「蜂の巣……………」

「想像するな。とりあえず、大衆酒場で時間を潰すよ」

「一緒に居ても良い？」

「俺の妻だろ？」

「はい」



「分かりきった事は聞かなくて良い」

「うん！」

あーもう！可愛いな！ヒナタに見つかったら終わりだな

「さてと。ちよいと逃げるぞ」

「どうして？」

「ヒナタがどす黒い笑みを浮かべてライトボウガンをこちらに構えている」

「！？」

「逃げるが勝ちだ！」

「ふえ！？」

俺はミーシャをお姫様だっこにしながら猛スピードで逃げた。後ろからボウガンの弾が飛んできているから明らか狙われている

「あぶねえ！」

遂には空に逃げないと避けきれない状態に

「おわああああ！」

「飛んでませんか！？」

「飛ばないと避けきれん」

しかし、真の恐怖はここからだつた。ヒナタはこちらに向かって銃口を向け、正確に俺の翼を貫いた

「うお!？」

少しよろけたが、なんとか着地し、顔をあげたら銃口が……………あ、オワタ

「何でにげるんですか？」

「宿に戻つたら蜂の巣にされるのが目に見えたから」

「そんなことしませんよ」

「翼を貫いたくせに？」

「……………」

俺はミーシャを横に立たせ、ヒナタの首を薙いだ。

「ヒナタの真似をするんじゃないやねえ、偽者風情が」

「いつから偽者だと気付いたの？」

「しゃべり方が一緒だと虫酸が走るんだよ。ヒナタとはかなりの時間を一緒に過ごしてるんだよ貴様が偽者だって気付いた時からこの場所に誘導してたんだよ」

「私に気付かせない様にするためにね！」

めのまえのヒナタの頭が弾け飛んだ

「しかし、よく気付いたなヒナタ」

「私は誰のなに？」

「お前は、俺の、妻だつて言いたいんだろ？」

「あたり。あんなのが彷徨っていたなんて考えただけでゾツとする」

「さすがにもう現れないだろ。今のが、恐らく密林で襲ってきた奴だろうから」

「密林で？」

「ああ。ララのコピーも一緒にな。確か、遺跡で襲ってきた俺のコピーを出来損ないって呼んでたけど俺はそうは思わない。あいつは最高だよ」

「どうしてそんなこと言うの？だつて殺されかけたんだよ？」

「タシカニ……………アノトキハ……………オタガイニ……………コロシアイヲ……………シタサ」

「貴方は！」

「でもな、今の俺がいるのは、オリジナルであるクロスがいるから

だ。クロスが俺を吸収していなければ、俺は完全に消滅していただろう」

「貴方は誰の体で喋っているかわかっているの!？」

「勿論、クロスからは承諾を得ている。と言うより無理矢理表に出されたのさ。あいつは俺を再びお前と対面させるために」

「……………」

「この体はクロスだ。撃てばクロスにダメージがいくことをわかってもらいたいな」

「と言うより撃つなヒナタ」

「クロスさん？」

「ああ。本人だ。って言うかアルファは説明下手すぎ。俺が言うよ、単純に和解だよ。あいつといるのはなにかと都合が良いからさ。技なんかまんま俺だし」

「あいつ殺す」

「ぶっそうだな。俺は必要なの」

「でも!」

「ミーシャ、大衆酒場に行こう。ヒナタは先に宿に戻ってな。妊婦には夜風はキツイ」

「ええ。わかったわ」

「あ、うん」

俺はミーシャと一緒に大衆酒場まで歩き始めた

「すまん、面倒事に巻き込まって」

「いえ、気にはしてないけど」

「なら、いい」

「あの」

「なんだ」

「私、実は……………」

「君がアイルーだってことなら最初から分かっているから言わなくて  
良い」

「なんで……………」

「なんで分かったのか？単純なこと。俺は君みたいに人の姿になれる  
モンスターを何体も見すぎたせいだよ。それから、何となくだけ  
と相手の種族がわかるようになったのは」

「それじゃ……………」

「DH4029」

「あ……………」

「やっぱりか。改造されたんだな」

「でも、なんでそれを……………」

「そこを壊滅させたのはなについて聞いてる？」

「確かZNO……………」

「ZNO・01、ティガレックス、ナルガクルガ、グラビモス、リ  
オレウスの遺伝子が入った通称、改造されし者の成れの果てと呼ば  
れる存在」

「なんでそこまで詳しいんですか！？まさか貴方はあそこで働いて  
た……………いたっ」

「最後まで話を聞け。その名は伏せられているが一部人間はしって  
いる。その名は……………」

「ちょっと待って！もしかして貴方が……………」

「ご名答。あそこを壊滅したのは俺だよ。クロス・ライト、もう1  
つがZNO・01なんでね」

「なんで、なんで！」

「あの改造にはされた当時は憎くて仕方無かったさ。でもな、今は  
感謝してる」

「どうして!」

「皆を守る為の力に。自らを進化させる糧になったから」

「私は今でも憎いですよ」

「それなら、それを上回る程愛してやるよ」

「ミヤウ!」

あらら、泣いちゃった。暫く受け止めてやるか。

「大丈夫」

「……………ひぐつ」

「ミーシャ」

「みゅう!?!」

俺はミーシャを抱き締めた。そして、少し遅れて爆撃が降ってきた

「少々やり過ぎてしまいましたか?Z01」

「『ティオリクセル!』」

爆風を吹き飛ばし現れたのはミーシャを抱えたクロスの姿だった

「おや?今までにない姿ですね」

「当たり前だ。俺はもう時の旅人では無いからな。姿が進化するの  
は俺が護りたいものを護ろうとした結果だ」

「実に興味深い。やはり、どんな手を使っても貴方を手に入れるべ  
きでしたね」

「以前俺を襲ったドスギアノスはお前が改造したものか？」

「こ名答」

「『絶対に許さない！』」

俺の口からでた声は俺のものではなかった。

「おや？今の声は」

「ああ。聞き覚えあるだろう？お前が改造したドスギアノス……  
……リメルの声だ！」

そう、昔俺が倒した時からリメルは俺の中にいた。

『あんただけは許せない！絶対に殺してやる』

俺の中から出てきた途端にそう言って速攻した

「はたして、貴女一匹で勝てますか？」

「『レギート』」



俺は奴の後ろに回り込んで右手にマグマを溜めていた

「先程とは姿が違いますね」

「マグマ・ブラスト」

『フリーズ・キャノン』

俺達が放った技は傍に居た実験台となったモンスターを盾にして防がれてしまった

「ふむ。これは凄い。ますます手に入れたくなる」

「『グレイダー』」

『クロス様？』

てか、リメルって俺を様付けで呼んだのかよ！新たな事実発覚したぞ！

「けどな、もう終わりだぜ？」

「なに！？何故体が凍っていく！」

『どうなっているの？』

「あうあう」

.....ミィシャが容量オーバーでパンクしてるよ。

「これで、終わりよ《エターナルフリーズ》」

そう、上からなら避けられない。上空に懐かしいあいつが来ていたから賭けてみたが正解だったな

「しかし、失敗は許されなかったぞ？ディア」

「そこを信頼してくれたんでしょ？」

「まあ、ディアだったし、失敗する筈無いなって思ったから」

「リメルさん。お久し振りです」

『貴女、本当にあのディアなの？』

「ええ。貴女の所で一番弱かったあのディアです」

パキンッ！氷は奴もろとも粉々に砕け散った

「リメル、ディア、続きは雪山でやってくれ」

「わかってる」

『わかりました』

二人はその場から瞬間で消えた。ってか速いよ

「ミーシャ」

「あうあう」

流石は元アイルー、パニックると耳と尻尾はちゃんと出てくるんだな

「えい！」

「ふにゃあ！？」

あゝ、このまま弄ってたい

「やめてえ！」

「ごめんごめん。面白いくらいに混乱してたからつい」

「もう！」

突然キスをされた

「これで許してあげます」

何だろうか、なにこの可愛い生き物

「大衆酒場行くぞ」

俺は冷静になりすぎて感情が凍ってしまった。やりすぎだな

「うにゃ〜ん」

俺の腕に飛び付いてくるミーシャ。感情を凍らしたのに一瞬で溶かすな！

「ふえ！？」

俺はそのままミーシャを抱き抱え、宿へお持ち帰りしたのは言うまでもない

「すまん、ルイ」

「いえ、逆に助かりましたよ」

俺はルイにララ、ヒナタ、ミーシャをポツケに連れ帰るように言った。俺はここに來た本当の用事を済ますため暫くは村に戻れない

「じゃあな」

俺は皆に別れを告げ民住区の一角に來ていた

「変わらないな。掃除してくか」

そこはかつてクロスが師匠と共に住んでいた家があった。

「全然汚れてないし、埃もない」

犯人はわかっていた。テーブルの上にヒナタからの手紙が置いてあったから

『クロスさんへ

この家の事はギルドマスターから聞きました。かつてあなたが師匠と過ごしていた家だと。

きつと私達を先に帰らせてここに来ると思い手紙を残しておきました。あなたが読み終える頃には後ろに私が立っていると思いますよ？

ヒナタ』

「すべてはお見通しって事か？なあ、ヒナタ」

「何するかなんとかなくわかるだけだよ。これからどこ行くつもりだったの？」

「俺のハンターとしての始まりの地、ジャンボ村に」

「私も連れていってくださいますよね？」

「もちろん連れていくさ。そこに隠れてるミーシャもね」

すると、物陰から昨日見た猫耳が見えて

「おかしいですよ。気配も消して、居ることさえ感じ取れないようにしたのに」

千呪眼にそんなもの通用しないよ

「取り敢えず、一人だったら飛んで行けたが、三人だから、船旅になるな」

「そうですね」

「ヒナタの口調が少しおかしくなってるから直せ」

「あ、あの」

「ミーシャは耳と尻尾が出ないようにしといて、いろいろあると厄介だから」

「うん」

「よし、船旅は予測外だったが、師匠にいろいろ報告できるし、まあこれはこれでよしとしますか」

「？」

「クロスさんの師匠さん、死んじゃってるのよ」

「小さかったときに俺をナルガクルガから庇ってたな」

「そうだったんだ……………」

「そんな感慨深くなんって。確かに師匠の事は負い目に感じてるさ。けどな、それでも前向きに、明日に向かって生きていこうって。『どんな時でも前に向かって突き進め！』が師匠の口癖だったから

ね  
」

「それで、私の時も」

「そう。だから前向きに生きろって」

「もしかして、昨日の言葉も」

「ああ。師匠のおかげかな？今の俺があるのは」

「……………」

「だから、感慨深くなんなって。俺は大丈夫だから。前代、時の旅人として、俺に狩りの心得を教えてくれた、師匠に感謝してるから」

「前代ってどういう事」

「そのままの意味だよ。俺の前代。つまり、師匠は俺より前に時の旅人をしていたって訳さ」

「ねえ、急がないと船出ちゃうよ？」

「いけないいけない。早く船に乗らないとな」

俺はヒナタとミーシャの手を引き港へ走り出した。師匠……………  
…約束は果たさせていただきますね

「船を出せない？」

「はい、只今沖合いにてラギアクルスを確認したため船が出せない

状況なのです」

「出せるよ。そのラギアクルス、もう喰われてる筈だから」

「はい？」

「とにかく、ラギアクルスはもういないから船は出せるよって言うてるの」

「なぜ断言できるんですか？」

「ん？ああ、それはなヒナタ。俺の相棒の一人が共食いしてくれたおかげかな」

「共食い！？」

「ああ。共食いをしたのさ、俺の一番最初の相棒がね」

俺の最初の相棒……………暗黒ラギアクルスのラッキー。龍の渓谷で最初に出逢った契約モンスター

俺は胸に拳を当て海を見た。もうラッキーは俺の中に戻ってきてはいるが、俺は眼を凝らして見た。……………ガノトトスウウウウ！

「戻れ。てか、強制回収」

海の中から光の玉が俺の中に入っていた

「油断も隙もない」



俺はミーシャの所へ向かった。思い出した、あいつが何者か、元の名前がなんだったのかを

「へえ。それじゃあ、誰に仕えてたのか思い出せないんだ」

「はい。その方のお弟子さんと樹海に放り込まれた事もありました。確かそのお弟子さんが怖いことをその時に言っただけです。それは……」

「『こんがり肉にして食っちゃまうぞ弥生』」

「はわああ！ごめんなさい！ごめんなさい！もう無茶は……  
…今なんて……」

「数奇な運命だよな。昔に一緒に居ただから。なあミーシャ。いや、弥生」

「私……」

「大丈夫。もうこんがり肉にして食っちゃまうなんて言わないから」

「そんなことじゃないです！ただ、今でも思い出せないんです。クロスさん、貴方が私と一緒に樹海に放り投げられたんですよね」

「間違いないな。お前が弥生であるかぎり」

「私の昔の名前」

「ミーシャって名前に変えたのは俺だな、ついさっきまで忘れてた

けど」

「何で忘れていたの？」

「最後にミーシャと一緒に居た記憶が、リメルに刺されて死んでから先が無いんだよ」

「あ……………あ……………」

「正直に言わせてもらおう。あの時、お前を研究所の外に投げた闇の塊。あれは俺だ。お前は俺が死んだ後、連れていかれ改造されたと考えれば難しくはないだろう」

「……………」

「どうしてもあの様な姿になっていたのかは聞かないでくれるとたずかる。俺はヒナタとミーシャを守る。守り通す。ただそれだけだ」

「船旅は長いし少し休みましょ」

ヒナタがフローしてミーシャを船室につれていった。俺はそのまま、船の上から姿を消した。

「……………クロスさんは何も悪くないのに」

「貴女も少し休んだ方が良くと私が判断しただけよ」

そんな二人の会話を遮る最悪の声が聴こえた

船から人が飛び降りたぞ！

「まさか……………！」

二人が外に出るとクロスはすでに居なくなっていた。

「そんな……………私のせいで」

「自分を責めないで。ただあの人は船の上よりガノトトスの上の方が慣れてるみたいなの」

「どういうこと？」

「つまり」

「こういう事ってわけさ」

海から何かが飛び出したと思ったら、そこからガノトトスとその背中に乗ったクロスが出てきた

「ほえ」

船に乗っているハンターを含む他の人々は呆けていたがヒナタだけは違った

「そっちの方が速い？」

「明らかに速いぜ。あと二人なら乗れるけど？」

「なら。そっちに行くわね」

「了解」

「それじゃあ、飛び降りるわよ」

「ふえ〜!？」

「よつと」

焦れったいのでガノを下で待機させ、二人の目の前にジャンプして降り立った

「めんどうだから抱えていくぞ」

そう言つて二人を両脇に抱えながらガノの背中に降りると

「遠慮は要らねえ。飛ばしな!」

船を圧倒的なスピードで引き離した

現在地：ジャンボ村港

「……………」

この波動は……………」

「行かないの？」

「早く行きましょ？」

「ああ」

俺達はジャンボ村を歩いていく。すると、見覚えのある人物を見付けた

「村長……………だよな」

「む？誰じゃ？」

「俺だよ。パロウの一番弟子のクロスだよ」

「ほお……………小僧がよくここまで大きくなったものだ」

「つつせえ！」

「後ろの別嬪さんはなんじゃ？まさか、狩りのメンバーじゃあるまい」

「二人とも俺の嫁さんだよ」

「ほお、結構な大物になったな」

「今日来た理由はわかってるよな？」

「どうせ墓参りじゃろ？」

「どうしても今日したかったんだ」

「パロウの命日じゃからか？」

彼の発言に後ろの二人は驚き、クロスの表情は曇る

「ああ、墓参りは俺一人で行きたい。二人を休める場所に行かせたいんだが」

「小僧が昔使っておった家なら残っとるぞ」

「助かる」

「のお」

その言葉の先は読めてしまった

「俺はポケ村でやっていくつもりだよ。向こうには待っている仲間や家族がいるからね」

「む……………そうか。小僧、気張っていけ」

「おうよー!」

俺はヒナタとミーシャを昔、住んでいた家に休ませてきて、一人岬にある1つの墓の目の前に居た

「昔からこの景色が好きだったよな」

すまん師匠。どうやら、あんたには直接話す方が早いみたいだ。

「悪いが、弥生は俺の嫁にさせてもらったぜ!」

「ほお。愛弟子が……………悪のりし過ぎやしないか?」

突然、岬の崖下から声がした。当たり前だ、さっきからしている波動はこの人じゃないと出せないからな

「なに言ってるんですか？俺たち置いて勝手に死んだのはあんただろ！」

「師匠に向かってあんた呼ばわり。調子に乗りすぎだ！」

崖下から強風と共にミラボレアスに乗った師匠が現れた

「覚悟は良いか？クロス」

俺は目の前の師匠の墓を粉々に粉碎してから言った。

「悪いが、敗けるわけにはいかないんでね。そっちがその気なら俺も容赦はしない！」

俺の背中から翼が6枚生え皮膚が割れた

「覇剛神龍クーネカムルバス」

「ほお調子に乗るなよ？」

「俺は敗けない！守るものがたくさん出来たからな！」

そして、俺と師匠の師弟勝負が始まった……………

俺の物語はここで一旦幕を降ろす。ここから先はまた別の機会に進めるとしよう。





番外編：遙か昔の記憶……………

「悪いが、敗けるわけにはいかないんでね。そっちがその気なら俺も容赦はしない！」

俺の背中から翼が6枚生え皮膚が割れた

「覇剛神龍クーネカムルバス」

「ほお調子に乗るなよ？」

「俺は敗けない！守るものがたくさん出来たからな！」

俺は師匠に向かって突撃していった。

「覇幻焼！」

「調子に乗るなど言っただろ？」

ミラボレアスに火炎ブレスを吐かれ、後ろに吹き飛ばされる

「調子に乗ってるのは……………師匠の方だ！」

俺の背中の中は4枚消え残りの2枚が純白の翼に変わった。そして、俺の姿は元に戻り、髪はパールの様な色に変わっていた

「神醒、クーネリオン」

「クロス、旅を終えたな？」

「ええ。現、初代・次元の旅人ですよ。手加減は無いです!」

俺はそのまま師匠の後ろに回り込み首筋に鋒を当てた

「勝負あります」

「負けたな。しかし、どうやってそこまで速く動けた」

「翼は実際には使わなかった。光を越える速さ、神速を使えるんですよ。俺は」

「なるほどな」

しばらく師匠が考え込んだ後

「お前は今何処の専属ハンターをしてるんだ?」

「ポツケですよ。師匠ももう少し女らしくしたらどうですか?結婚できませんよ?」

「私の旦那はこのボラスだが?」

俺は師匠から離れ、ミラボレアスの眼前に来た

「大変ですね。気持ちわかりますよ。俺も似たようなのをたくさんパートナーにしていますから」

『私の言葉がわかるのか? パロウは頭に話し掛けないと分からぬのだが』

「そりゃ改造され続けましたから、言葉の壁なら当の昔にありませんよ」

『パロウはお前の事をいつも心配していたぞ。今日は楽しそうだったのでな我も嬉しいのだよ』

師匠が俺の心配を……………

【クロス！来るぞ！奴等だ】

闇の軍勢！？まさか、あいつ等はあの時にセアトと滅ぼした筈なのに！？

「どうやら話している時間が無さそうです」

『そのような。我もこの異様な力は好かん』

この人とは意気が合いそうだな

「太古祖龍、ミラルーツ」

『クロス、またやる気か？』

「やらなきゃ終わらない。それにもつやられる気はない！」

太古祖龍の形は普通の祖龍より形が青龍の様な形に近い形をしているため、俺の中の祖龍の力も太古祖龍になっていた

「異常変換！ミラルーツ！」

異常変換。俺が改造された際、目覚める筈もない他の遺伝子が目覚めた。その力を使うのが異常変換。幻獣キリン、祖龍ミラルーツ、紅龍ミラバルカン、黒龍ミラボレアス。俺の目覚めた力……………使いたくは無かったが、仕方がない

「一気にかたを着けるぞセアト！」

「言われなくともそのつもりだ！」

すると、周りが暗くなりうじゃうじゃと湧き出るように闇の兵士が出てきた

「テラカオス」

「これは流石に恐怖だな」

師匠が呟いた

「ですよ〜。だから俺も姿を変えないと戦えないんですよ」

「気持ちは分かるが、お前さっき改造され続けたって言っていたな」

「師匠が俺を庇って死んだフリして逃亡してからいろいろとあったんですよ。弥生だって記憶無くしてたし」

「ほお。後でキツイ仕置きをしなければならんようだな」

「出来れば止めていただきたい。一応改造されて人になったとはいえ、あの子はアイルーなんです。師匠の仕置きなど受けたらトラウ

マものですよ。あと、俺の嫁を苛めようとすんな馬鹿師匠」

一瞬キョトンとした師匠がきゅうに笑いだした

「はっはっはっ！言うようになったじゃないか！」

「絶対にミーシャを傷付けさせねえ。もし傷付けたらボラスさんが

.....」

暫く考えた後、良い案を思い付いた

「ボラスさんに師匠を説教してもらいますから」

『普段の鬱憤を晴らせて事か？承知した引き受けよう』

「師匠、ボラスさんは引き受けてくれたから、絶対に止めてくださ  
いね。俺の嫁弄り」

「あえて言おう。拒否する！」

拒否られた！

「拒否んな！」

「私は拒否する！」

拒否するなを拒否するってもはや無敵理論じゃねえか！

「遊んでる場合じゃない！さっさとけり着けないと」

「《紅雷召喚》」

セアトが紅い稲妻を落とし、周りの闇共を蹴散らしていくが、一向に数が減らない

「異常変換解除」

俺は一旦異常変換を解いた

「『オーバードライブ・ギア』」

とは言ったものの、どれを使ってもあいつ等を殲滅出来るような力はない。

『わ……………し……………ち……………て』

何だろう、俺の中から声がする

『私の力を使って』

誰だ？

『私に雷桜つて名前をくれたのはマスターでしょ？』

雷桜！？

『私たちジンオウガの遺伝子もマスターに入っちゃってるんでしょ？』

そうだが

『なら、使って？私もマスター助けたいから』

雷桜……………

「『オーバードライブ・ライトニング』」

俺の体を光と電気が迸り、姿を変えていく

「エレキ・ウルズ・ライトニング」

頭には碧色の狼耳、臀部からは同じく碧色の尻尾。体からは常に帯電している電気を迸り辺り一帯に放電し続けていた。

「これで……………きめる！」

俺は、師匠やボラスさんとセアトに当たらないように放電した。

「《サンダー・アイランド・デス・スパーク》」

技は辺りにいた闇の軍勢を消し去る所か、不穏な雲まで消し去ってしまった。デス・スパーク恐るべし！

「さて、終わったのだろうか？」

「師匠となんて戦う気は無いですよ」

「そうつれないことを」

「言いますよ。俺はさつさと二人の所へ戻りたいから行きますよ」

「よし、私も付いていこう」

な！？

「ボラスさんはどうするんですか！？」

俺が慌てて言うと、師匠が言う前にボラスさんが口を開いた

『長年生き続けた龍は人の姿になれる。私もそうだ、心配は無用だ』

それなら、別にいいか！

「この村の以前使っていた家に一時的に居ますから、ボラスさんを擬人化させてからきてくださいね。師匠」

たのむから、弥生……もといミーシャをいじるのだけはやめてほしいところだ。もし、やってしまったら俺が何をするか分からないからな

「さて、戻りますか。セアト、体の中に戻るか？」

『ああ』

姿も戻したのね。流石、完璧を求めるだけはあるな

俺はセアトを回収。後、二人の待つかつての家に向かった



「墓参りにしては遅くなったよな」

「あら、お帰りなさい」

「ミーシャ、理由も聞かずに逃げる」

「なんで？」

「また、極寒の地に放り込まれたくないだろ？」

「ま、まさか……………」

ミーシャの体は震え出す。当たり前だ、過去の記憶が曖昧だからと  
いって、あの恐怖は忘れられる筈がない

「ほお、二人して。そんなにたのしかったか？」

「「楽しい筈がない！」」

つい、聴こえてきた声に声を揃えて反論してしまった。

「し、師匠。いつからそこに？」

「お前が逃げると言った所からだな」

「絶対にいじらせないですからね！」

「私も人の相方をいじるほど失礼極まりない奴ではない」

師匠はそう言いながら、ミーシャの耳を強く潰していた

「思いつきりいじってんじゃねえか！」

俺は師匠からミーシャこと弥生を取り上げて抱き寄せた

「いじらないって言いながらいじってたよな」

「はて、私はいつそのようなことを口にしたかな？」

「残念ながら言い逃れは出来んぞパロウ。我もそれを聴いてしまったのでな、彼らの証人になりえるぞ」

「ボレアさん。ありがとうございます」

「なに、礼には及ばんよ。お主の妻を大事にする、その心意気に賛同したまで」

「それでも師匠を言い負かすのはボレアさんしかいませんよ？」

「なあに、いつも口喧嘩をしているとだんだん勝てるようになるものだ」

「なあ、そんなことをボレアさんが言ってるけどヒナタはどう思う？」

「私はクロスさんといつまでも一緒に居ればそれだけで幸せだから、喧嘩はしたくない」

「私もヒナタさんと同意見ですよ。かつての主人が今の私の旦那様

なんて幸せ以外の何物でも無いですからね」

なんか、さらりと爆弾発言してくれちゃったよ。元々の雇い主は師匠であって俺じゃない。記憶を思い出させた筈だから間違うことは無い筈なのだが……………」

「ん。弥生、それは宣戦布告と捉えて良いのか？」

「わかつちやいました？」

やっぱり挑発してたのかよ！

「やはり、白黒はつきりしないとわからないようだな」

「師匠、本気で殺りに行きますよ？」

「冗談だ」

冗談には見えないよ、その右手に持った太刀を見れば、本気だってバレバレ

「ミーシャもあんまり師匠を挑発しちゃダメだって。殺されかねないから」

「寧ろクロスが殺しかねないだろう？あれほどの力を出しておきながら、手加減していたのдар？」

「……………」

「だからと言って出し惜しみは好かん。私はいつでも全力でいけ

と言った筈だ」

「全力でしたら、モンスターが跡形もなく消滅したから、あんまり出したくない」

「どこまで化け物なんだお前は」

「少なくとも師匠を人指し指だけで殺せるほどの人外はけものですよ」

「……………」

師匠、黙らないで！その沈黙が物凄く痛いから！

「兎も角だ」

話逸らしたあ！

「一旦私達は巢へ戻らねばいけない」

「荷物を運んで家に来るつもりだろ師匠」

「その通りだ」

やっぱりな。でも、反対はしない。みんなで居ると楽しいからな

「確か、ポツケだったな？」

「そうだよ。ポツケ村で間違いないよ」

「なら、よし。またな、馬鹿弟子」

「誰が馬鹿だアホ師匠」

そう俺と師匠はお互いに毒を吐いて別れた。また再び逢えた喜びをお互いの胸に秘めて互いの目指す場所へ向かった。

.....

『ク.....ス.....さ.....』

誰だ、俺を呼ぶのは

『.....お.....て.....く.....い.....』

.....

『起きるっすアニキ!』

.....!!

「なんか長いこと昔の夢を見ていた気がする」

「もう。早く行きますよ。私たちの旅はまだ終わってないんですから」

「そうだな。行くか！」

そう、俺が見たのは.....300年前のまだ、異世界の渡人わたりびと  
と呼ばれる前の遙か昔の.....記憶

番外編：遙か昔の記憶……………（後書き）

この話を最後まで見てくださった皆様、本当にありがとうございました。

この話の続編を只今執筆中ですので、楽しみにしてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3489o/>

---

モンスターハンター～異世界に飛ばされて～

2012年1月13日20時48分発行